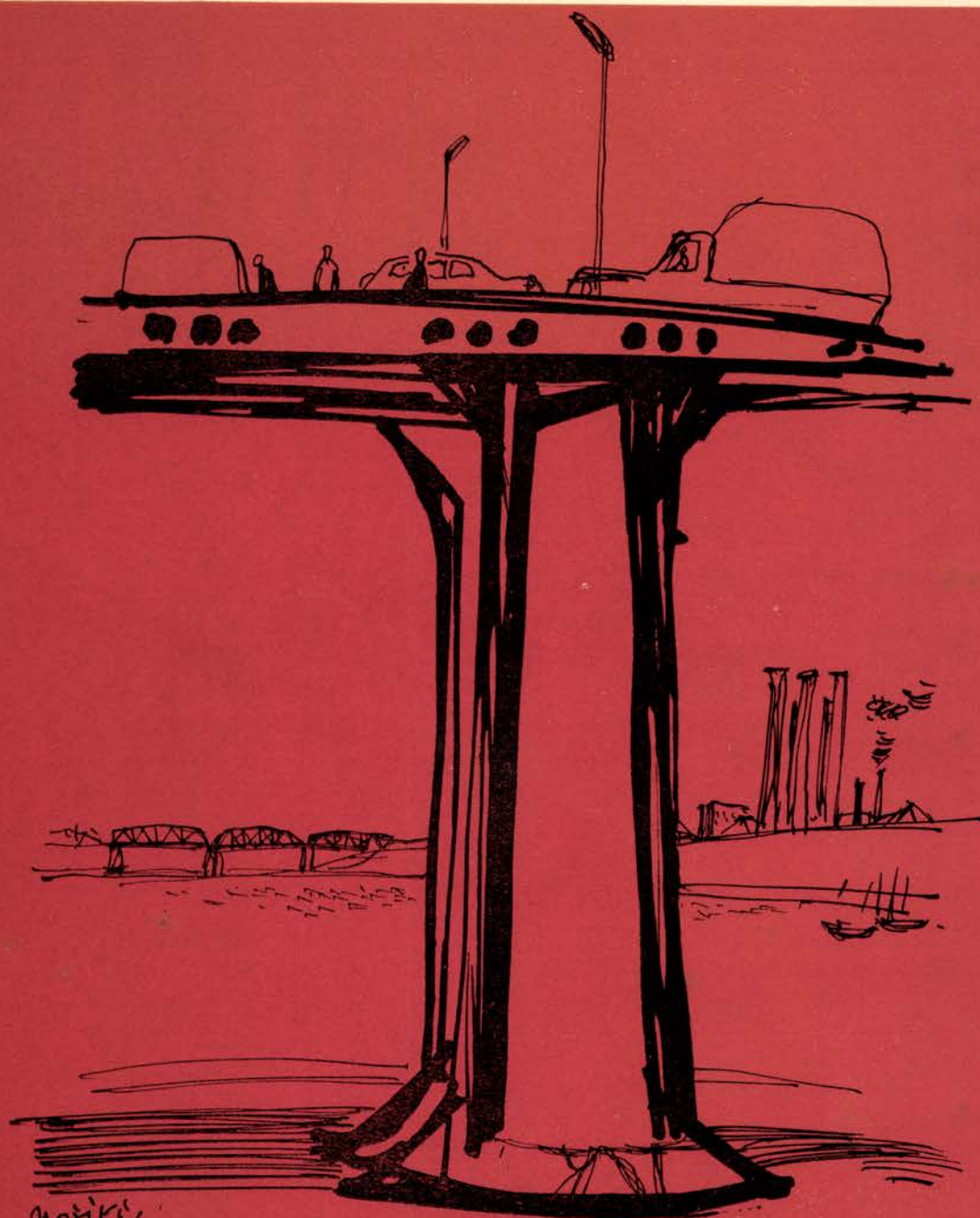


証の雑誌



麻生路郎☆主筆

五月号

No. 420

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

6月本社句会

兼題
天気予報
席品
アイデア
銘柄

本社五月句会

★静かな川柳道場でのダイゴ味に浸りましょう

日時 五月七日(月)午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スズ北側

兼題 「十字架」(211) 麻生路郎選

路郎選に限り七時半(切)

「駅」(211) 中島生々庵選

「半分」(211) 八木摩太郎選

「美名」(211) 小川恒明選

席題 三題(当日発表)

北川春果

呈賞 ★各題天位・各各題天位から路郎選により不刊

洞賞

会費 百円

幹事 紫白・淡井・いさむ・胡花・文彦・楠伯・狂二

・与呂志・白水・木洞・すむ・苗風子・柳雲子・別遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切五月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪朝六〇八一



川柳まつり 特別課題「情熱」(2句) 麻生路郎選 (切・六日末日本社着便付) (変裏面に文部省名推挙明記)

日時 7月8日(日)午後一時

会場 四天王寺本坊(電話七七一〇〇六六番)

天王寺区元町一七

司会 松江梅里

開会の辞 若木多久志

挨拶 中島生々庵

柳演 麻生路郎

兼題 「理想力について」 小野十三郎

「喜ひ」(211) 中島生々庵選

「声」(211) 北川春果選

「庭」(211) 清水白柳選

「来足」(211) 西尾琴選

席題 当日三題発表(各題三句)
出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に
雅另明記六月末日本社着便のこと

★特別課題「情熱」発表 麻生路郎選

呈賞 ★各題天位・各各題天位から路郎選により不刊洞賞

余興 有志諸家

閉会の辞 上井文輝

会費 百五十円(加者全部におみやけ進呈)

懇親宴 会費五百円(同会場において5時半から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(切六月末日)

川柳

不朽洞句帖

麻生路郎



散歩

今日は私生活だと云々。足を解いたので仕事の予定が一日狂った。ユツツな顔をしてるので、散歩でもしつらつやいと追い出された。一日の収入を手にあつた淋しい散歩である。

ご迷惑をかけますと 弱い足へ云う

子ども好き 散歩の足をしばしとめ

散歩散歩 こんなところに橋がある

散歩でも余裕に見られる人に逢い

散歩かいと女子大学に見おろされ

混浴

ある日、石切の五洲閣へ行つた。空中温泉で、見知らぬ五十近い二人の女性が浴槽に裸の如く立つていた。

混浴の女のポリウムに圧され

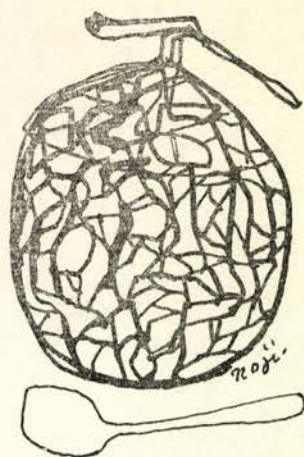
名誉市民

大阪にも名誉市民が生れた。白川朗吉翁・菅橋重翁が、その光榮に浴された。

名誉市民その尊さは皺だった

川柳雑誌五月号目次

★柳欄室	一路集	入門講座	★柳界展望	各地柳壇	金泥集	近作柳櫛	同舟近詠	川柳塔	おかる	大万川柳「へそくり」発表	★	おかる	大万川柳記念大会	一筆寸言	窓口談義	★現代柳人録	特集男の句	誕生	ある日のふんにようだん	碁と将棋	不朽洞句帖	生活の展開	名句と難句	私の見たハワイ	座談会	易談縦横	麻生路郎・表紙	野尻弘
(46)	「線路」	「初産」	(38)	清 水 白 柳	麻生路郎	北川春葉	諸 家	麻生路郎	富士野鞍馬	麻生路郎	不朽洞の人々	八木摩太郎	八木摩太郎	麻生路郎	麻生路郎	今 西 生 薑	東 野 大 八	直 原 七 面 山	今 西 生 薑	今 西 生 薑	川 村 好 郎	川 村 好 郎	麻 生 路 郎	若 本 多 久 志	麻 生 路 郎	松 江 梅 里	山 川 阿 茶	野 尻 弘
(46)	本多柳志選	長野井蛙選	菊沢小松園選	清 水 白 柳	麻 生 路 郎	北 川 春 葉	諸 家	麻 生 路 郎	富 士 野 鞍 馬	麻 生 路 郎	不 朽 洞 の 人 々	八 木 摩 天 郎	八 木 摩 天 郎	麻 生 路 郎	麻 生 路 郎	今 西 生 薑	東 野 大 八	直 原 七 面 山	今 西 生 薑	今 西 生 薑	川 村 好 郎	川 村 好 郎	麻 生 路 郎	若 本 多 久 志	麻 生 路 郎	松 江 梅 里	山 川 阿 茶	野 尻 弘
(46)	本多柳志選	長野井蛙選	菊沢小松園選	清 水 白 柳	麻 生 路 郎	北 川 春 葉	諸 家	麻 生 路 郎	富 士 野 鞍 馬	麻 生 路 郎	不 朽 洞 の 人 々	八 木 摩 天 郎	八 木 摩 天 郎	麻 生 路 郎	麻 生 路 郎	今 西 生 薑	東 野 大 八	直 原 七 面 山	今 西 生 薑	今 西 生 薑	川 村 好 郎	川 村 好 郎	麻 生 路 郎	若 本 多 久 志	麻 生 路 郎	松 江 梅 里	山 川 阿 茶	野 尻 弘



川柳 名句と難句

麻生路郎

耕され尽した感じ後妻くる

(清生)

人に接するにも、身だしなみにしても、一応の心得を身につけてい。どこと云って欠点はないが、初婚者の持つ純真さや新鮮さは見られないのを、「耕され尽した感じ」と云ったのであろう。「耕され尽くした」と云う句語を発見した作者の手腕にみなみならぬ苦心がある。

〔三一二〕

ペンギンのネジをかけたくなる姿勢

(知恵美)

ペンギン鳥の平和な姿を覗ての感想として面白いネライだ。映画で覗たのか、実際に見たのか、それは判らないが、そんなことはどっちであっていい。ネジをかける、ヨチヨチと歩く玩具からの聯想が生んだ句。

〔三一四〕

ハネムーンの便り教えた宿に居ず

(堰子)

どこそこへ行ったら、何々屋へ泊まれ、あそこはなかなか親切な宿だと教えてやったが、便りを見ると、そこには泊まっていなかった。

こんなところにも、世の移り変りのあることが知られる。そんな宿屋はもう過去の宿屋であつたのか、近頃の新婚者が昔のそれよりも世馴れたためか、おそらく、その両方だと云えよう。

〔三〇七〕

シームレスかとおもたら春をもう脱いで

(みのる)

車中と見てもいい。िकास女性だワイと眼をそそいたら、ニュッと足を斜めに、シヨウトスカートからのぞかせている。はじめはシームレス(縫い目なしのソックス)かと思っていたが、そうではなかった。春とは云うても、まだ寒いのに、肌をむき出しにしているのに一驚を喫したと云うのである。近ごろの女性の一面を捉えている。

〔三〇八〕

春の水籠の鳥にも入れてやり

(村諷子)

なんと云う静かな生活であらう。籠の鳥にも、心づかいを忘れぬ主じのあたたかさが、にじみ出ていてうれい句だ。俳趣もあるが、この句は表現上から見て、どこまでも川柳の域を脱していない。

〔三〇九〕

人間のあげ底政治家と名乗る

(三窓)

人間のあげ底とは面白い表現だ。中味は至って少ないのに、余所目にはいかにも、嵩張って見せようとする人間、そんな人間がオレは政治家だと名乗っているというのである。たしかに政治屋の一面をつかんでいる句だ。常にフン反りかえっている癖に、選挙となるとバツタのようにお辞儀をする。よくも自分をかえりみて淋しくならないものだと思う。

〔三一〇〕

続西成界わい

亮春亮春花札を片付ける

(満潮)

赤線地帯に灯は消えたが、亮春が無くなくなった訳ではない。この句によると、西成界隈では、あい変らず街娯が法網を潜って春をひさいでいるのだ。この句はヒモが呼び出しにきたのであろう。

商売商売と云って、花札を片づけ、肌脱ぎで鏡台に向う彼女たちの生活が想像される。社会のダークサイドを巧みにキャッチしている。

〔三一〕

真人間になれとはなんと退屈な

(白香)

競馬競輪に魅せられて、家業には上の空である。

「あなたは幾ら貧乏してもいいとしても、それでは奥さんやお子たちはどうなるの……」

「……」

「真人間になんなさいよ。立派な腕を持ちながら、借金だらけでは誰もあいてにしてくれないでしょう。」

「そりゃ、そうだろうが、今更真人間になれと云ったってムリだ。家業、家業と云うが、食うてチョンの仕事にはウンザリしているんだ。政治の貧弱を罵って見たところ、どうなるものか。真人間になる。それは理想かも知れぬが、現実には退屈そのものだ。まあ、うっちゃっておいてもらいたい」と云うのである。

強いようで弱い斯うした人間の心理をビシヤリとつかんでいる。

〔三二五〕

リフトから見ればあいつもこけている (藍児)

「いっかど滑べれるように、云っていたが、あいつもこけている」

と、リフトの上から、微笑を禁ずることが出来なかったのである。

あいつも、オレもチョコボチョコボだと思つと、まことに愉快であると云うのであろう。ユーモラスな句だ。

リフトというのはスキーヤーが、山の頂きにヨチヨチ登らなくても、料金を出せば山の上まであげてくれる簡単な一種の昇降機。

〔三二六〕

世の移り下駄を履くことの久しけれ (雄声)

中年以上の人の感慨であろう。世の多くの人は洋服から寝衣に、寝衣を脱ぎ捨てりや洋服にという生活に慣らされて来たので、下駄を履くことから知らずしらす遠うざかったのである。停年退職して、はじめて、和服姿を見た人もあるであろう。これこそ「下駄を履くことの久しけれ」である。

〔三二七〕

浩の宮こども等の方ばかり向き (恵二朗)

皇孫浩の宮さんの周辺は常に大人ばかりである。たまたまこどもばかりの集会へ行かれても、少し距離をおいて、その周辺は

大人ばかりであるように思える。

こどもには貴賤もなければ階級もないわけだが、一緒にヤンチャをさせてはもらえないのは、どうした宿命であろうか。こども好きの筆者には、この句を読むと、何んだかお気の毒な気がするのである。

〔三二八〕

温室育ちですと新任如才なし (麦彦)

新しい課長が来た。

その挨拶に、「私は温室育ちですから、何かと、皆さんに、おすがりして自分の責任を果たさしていただきます。」と云ったのである。そこには大学を出て、この道一筋であると言ふ誇りも含まれていると見てもいいだろう。新任の如才なさが、そんなところにもうかがわれる。

〔三二九〕

まだ換算する癖がありキロ、センチ (湖山)

英語会話などでも、ウ呑みにしないで、すぐに翻訳しようとするものですが、度量衡なども、一キロだとか、一センチだとか云うと一応尺貫法に換算するクセがある。専門に取扱うものか、たびたび繰り返すものの外は、ウツカリ換算するものだ。

筆者などは、兵隊に行っていないので、家を探した場合、東へ三〇〇メートルほど行ったところだと教えられると、こうつとと、すぐに換算するクセがあるが、編集の仕事で、絶えずカットの大きさを計るの、何んセンチだと云われても換算しない。

でも、その大きさが判ることになっていく。

この句には詩情はないが、度量衡の改正が行われた過渡期には一つの穿ち句としての存在価値が認められるであろう。

〔三三〇〕

タクシーのとりあい見てる雨やど (緑雨)

雨がバラバラと来た都会風景の一コマである。

都会人は何んかにブツつかると懸命になるクセがある。そこで、一寸の雨にもタクシーの奪い合いがはじまる。

そのうちに胃れるだろうと雨やどりをしている悠々派の人達の眼には、殺気立ったその情景がいかにコッケイに映ったのである。

〔三三一〕

大詰の雪も汚れて楽となり (春雄)

歌舞伎劇を詠んだ句であろう。まるで古川柳のようだ。大詰の雪と云っても、今の若い人たちは判らない人たちが多うからう。代表的なものは忠臣蔵の義士引揚げの場か。「楽」は千秋楽の略である。

演劇の最終日の意。千秋楽とは雅楽曲の一つで法会のものであるが、転じて演劇・相撲など興行期日の最終日を千秋楽と呼ぶようになったのである。今日でも「ラク」と云っている。

〔三三二〕

みるからに味気なく服む胃のくすり (弦太朗)

ひたいに酸を寄せて、いつも憂鬱そうな顔をして、胃のくすりを嘔んでいる姿はみるからに味気なさそうだと云うのである。たしかに、そんな人に接すると部屋までが鼠色に塗りつぶされた感じがするものだ。

〔三三三〕

BG十五年と云う不しあわせ (愛場)

ビルと云うビルから吐き出されるおびただしいBG(ビジネスガール)さんの中には動機十五年というは稀れではないだろう。彼の女たちは、いつの間にかやら、昇給して係長とやらにもなり、男性を凌ぐサラリーウーマンとなったが、そのために結婚適齢期は過ぎてしまいい、ハツと気づいた時には、後妻の口しかなかったと云うことを不しあわせと詠んだのである。果してそれが、ふしあわせであるか、どうかは疑問であるが、従来の常識から云えば、ふしあわせだと云えるだろう。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣袋も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

奈良県 上田 翠光

神経の少しズレてる唄が咆え
慰める程には落ち目みてやれず

西宮市 若本 多久志

死亡ゼロ成らず政治の貧困さ

親知らず子知らず国道二号線

男心百も承知で又かかり

ツイストというのはつまり阿波踊り

リバイバルあああの頃は若かった

大阪市 正本 水客

出土品闇の重さになれた色

静観という手があったのに気付く

銀婚に近き夫婦の笑い声

高槻市 丸尾 潮花

目薬へ視界は今日も濡れたまま

緑談を逃げてスキーをかついで出

夢は飛ぶあの山越えて夢は飛ぶ

堺市 八木 摩太郎

土佐で迎うわれ還暦の誕生日

土佐ブームはりまや橋は金が落ち

ガイドから悲恋の話聞く日なり

関取りの腹には困る竜河洞

狸通居を訪う

柳談はつきず狸ばなしも出ずじまい

大阪市 北川 春葉

長男K大学入学(三句)

入学試験すめばたちまち春の宵

孝子とや云わん晩酌追加さし

これからの英語は入試用でなし

ハワイ 羽佐間 柳葉

無礼講平はやっぱり畏まり

自由論籠の外れた桶に似て

娘の柩を送って

俗名で明日から呼べぬ娘の位牌

堺市 吉田 圭井堂

折さげて順番を待っているトイレ

テーブルが別れてメニューはかどらず

親だけで子はかすがいと思つてず

経済の浅さは葦のそよぎにも

あやかるにしても九十五はちょっと

下関市 国弘 半休

路郎先生を訪ねて

何時までも恩師と山河なつかしい

放火魔も聞いた強風注意報

防府市 長野 井蛙

奪うもの奪えば男空空し

先生を生徒も鉢巻して吊し

愛情にライバル野暮な水をさし

岡山県 直原 七面山

北風の街をクニャクニャグイボーイ

古い浮気を妻は時効にしてくれず

ダンブカーに似ていて頼りになるお方

訪う人もなき妾宅のお元日

公僕は冷暖房で事務をとり

黒を着て女は色気など見せず

大阪市 西森 花村

亡き母の分まで叱る父となり

いたずらをする気障子を閉めに来る

大都会とやらでメダカも子は知らず

豊中市 足立 春雄

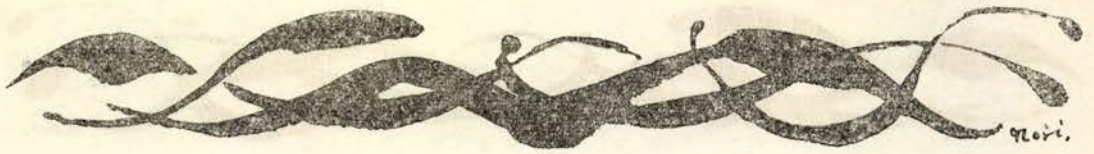
冬オーバじじむそなった陽の光り

原色を眩しい程にエア・ポート

不愛想な顔で待ってるエア・ポート

万葉も横書きにして講義され

倉敷市 木村 千容



息詰まるような沈黙親と子の
たよりなく思う日毎の提げ靴
友情に酬ゆるに陥穴をもってす
電話説教のあたりがこそばゆし

加賀市 野村 味平

木枯へ案山子は堪えた姿なり

三カ日テレビは下から借りられる

当落のニュースを屋台さかなにし

大阪市 木村 水洞

無視をする肚で審議会にかけ

九条が邪魔になるほど成長し

事故死亡客がニュースになる世相

自動車の通れぬ路地を羨まれ

大阪市 真鍋 一瓢

遠がすみ猫もはるかを見る目にて

飢えた亀うじやうじや天王寺さんの春

やんわりと話を下げて取るチップ

氷山の一角を警官雲霞の如く

大阪市 後藤 梅志

お見舞にゆき青汁をよばれて来

女房のにも茶柱が立って居り

どんな気か盆提灯が輸出され

納豆やとろろが好きのままで老い

米子市 小西 雄々

深夜喫茶都会は丑満時も寝ず

孝行をしてあげたいと思うだけ

P T A子が勉強をせぬ話

しぶしぶと妻へ映画のおともをし

ステレオでもつたいたなくも浪花節

大阪市 山川 阿茶

ベタハーフたよりに仕事又受ける

ネジ一本ぬけるようながさわがれる

お祝いをあわてて買うてもちになり

大阪市 金井 文秋

口先は便利なものと詐欺笑ひ

不意打ちの客へずばらな寝間を上げ

加賀市 那谷 光郎

サア酌いでおくれと女気が変り

靴下のたるみガラガラ蛇に似て

ホームバーとうとう塩辛塩こんぶ

ふてぎわを笑って目薬さしてくれ

下関市 桜川 不水

カレンダー二月のままに節句が来

病人の手でカレンダー春となり

車にもあった神風日本魂

愚孫黄坊中学へ入る

薫風に五つボタンの胸を張り

岡山市 浜田 久米雄

人間の嘘ずけずけと電話口

冷蔵庫文化の波に勝てず買い

小心の男へきつい花吹雪

花盛りお床に花が活けてなし

出雲市 尼 緑之助

政治家をけなしながらも頼みこみ

倍増の夢のむなしさ花咲けど

大阪市 水谷 竹莊

顔役は番外という顔でくる

自家用に犬まで乗せた令夫人

奈良県 飯降 白香

ひな料理インスタントで間にあわせ

制服を脱げばすでに媚態もち

真面目さが買われた時代はとうに過ぎ

うちかけて小作の娘が嫁にいき

大阪市 阿万 万的

カキのように高架にへばりついた家

お人好しでふけてお耳も遠くなり

一等車座れば老眼鏡をふき

岡山県 福島 鉄児

体験を生かすことなく落伍する



自動車の渦へボリさんかき消され

岡山市 服部十九平

懇談に長けて音痴も座が保て

質屋から出て来て仰ぐ青い空

守衛長女社長を殿で呼び

西宮市 若林草右

阿伝だけで生きる仁王を虫が喰い

定年の後は情力で髭を剃り

広島県 山田季賛

雪の図画黒クレオンを引立たせ

闇の夜を貨車黒黒と通り過ぎ

上によく下に悪いがする出世

義理立てる見合すんだと娘言う

打込めば素直でなかった地の固さ

岡山県 田村藤波

借着してのぞく下着に気をとられ

からくりの視線は横を向いており

児島市 本田恵二朗

つぶし値にしてもどえらい嫁支度

三寒四温みたいにくれ面を見せ

京都市 松川杜的

咳き込んだ途端一桁また違え

庭中を隣りのおしめがかげらせる

鳥取市 森本法泉子

六二年士族の商法まだ残り

バラのとげ冬はきびしいものと知り

酒のめば傭員本当のことを言う

堺市 高崎雄声

我道を行く平で泳いだ三十年

お祭りの世話役として稚氣残り

金よりも素直に聞ける子が欲しい

島根県 藤井明朗

サラリーが上ると妻をなだめとき

決算の監査口下手怪しまれ

花便り今年に妻も行くと言う

倉敷市 野田素身郎

学芸会わが子は通行人の役

養老院土筆を摘んで今日も暮れ

退庁のサイレン頭痛がスーッと消え

大阪市 清水望峰

お女将さん胸算用でおべんちゃら

マネキンの臍もあるべきとこにあり

父親も男一人と見る娘

つつもたせチャチな背広をはいだけ

大阪市 伊達堰子

花火あげて何んだろ朝鮮人ばかり

いとし女房池田に見せたい値切りよう

火も無いに先き寝なはれと縫い続け

まだ残る白衣の唄にさびがのり

尼崎市 坂田東洋男

血圧を角の酒屋に忘れて来

幼稚園へ行くのに袖の下が要り

我が庵はガード潜った露地の奥

大阪市 不二田 一三夫

ほくの財産ファイトだけとはさびし

さすがわが娘よくぞ課長と喧嘩した

柏嶋の結びへ集金待たされる

芦屋市 丸川初甫

末っ子は駄駄をこねこね損をせず

雨降りの土産が旅のじやまになり

夢で逢い現実で逢いまだ足らず

唐津市 新岡回天子

意気強く女中さんと呼べば返事せず

岡山県 池田古心

病院に来て私一人でないが知れ

大阪府 早川清生

団参の帰路商用で一人消え

長屋まで落ちて長屋の世話をする

派出婦にきても値切らずには買えず



愛のむなしさびつしりと墓碑ならぶ

堺市 辻圭水

筆不精恋の便りはまめに書き

同じ日に生まれ使う身働く身

もう一杯砂糖入れてとよう云わず

好きですと一言云えず寝つかれず

岡山県 野々口美舟

べんとうは漬物だった倦怠期

三月の陽ざしに袴のあかが浮き

名古屋市長 田満秋

正論を吐くいきかきも淋しけれ

日曜の道路が少し広くなり

池田市 前川左文字

寝転べばみんなの空に平和あり

ラッシュアワー君の呼吸が近すぎる

卒業式

皆大臣になられちゃ困る卒業生

岡山県 池上知恵美

遮断機が上って雨がすべり落ち

一風呂を浴びた如くに雨上り

大阪市 橘高薫風子

この頃の尿の細さよ落ぶれぬ

黒髪を剃るも女の魔性と見

恋に倦み女魚より生臭し

労働歌謡が歌えば凄かろう

万歳万歳淋しさの残りける

大阪市 榊本 蔚児

無精髭はやして長女に叱られる

みをつくしもう父ちゃんの帰る頃

大阪市 西川 晃

左手に詩集右手で札をよむ

さめざめと女涙を娘しめり

カタコトでパパとママとを遊ばせる

岡山市 林 葵丘

二次会へシャンとしたのが一人つき

青い目が真価みとめた備前焼

割箸を割れば汚職へつづく道

神戸市 仲 どんたく

見合い用象をバックに撮るとする

リバイバル紫煙の中にあの頃を

だったんのおどりで春の幕をあけ

平田市 久家代仕男

ほろ酔で寄れば一白掲かされて

ゲートルを巻いて律義な郵便屋

お刺身のつまなり君の存在も

大阪市 本多 柳志

実力で這入ってコネに侮られ

公立は無理私立へはようやらす

虎の巻ミズプリントのまま覚え

待たされた脚ですねてる赤電話

定年の脚にも巻いた磁気バンド

出雲市 原 独仙

そもそもは通勤列車で出来た仲

いっどこで覚えた娘バイク乗り

西宮市 樋口 舟遊

贈答の鮭値踏しながら切られる

私に似てるとオコセ買うも女

料理屋へ石垣毒の向く二月

年越の鰯へ鯛が売れ残り

佐渡市 高野むじな

よそ行きが喪章のままになつていた

スト応援運動会に行く如し

お医者さんにもとれない貸しがあるそう

大阪市 石倉 旅風

これからは夜とネオンが動き出す

死者零の日を不覚にも不思議がり

連続のテレビを切ってもてなされ

木造の借家の味を知らず死に

したいこととしていて何の孤独かや



大阪市 魚住 満潮

続 西成界わい

手を出したはお前とケンカまだ続き

一家心中テレビの月賦まだ残り

いいかげんに去にやと暖簾はずしてい

愛媛県 村上 旭童

だいぶ日がなごなつて来た麦のたけ

いつからか花屋は春になりにつけり

坪一万のたんぼに草をしげらせる

住宅がここまで押して来たたんぼ

会吉市 大前 鳴恍

病院の恋は夫婦に似てたのし

病人の抵抗箸に手をつけず

陣笠の入院見舞を山と積み

大物の葬儀お寺の壁も塗り

神戸市 傍島 静馬

薬剤師の免状あつて嫁きおくれ

おばはんにアチャコの手付で割り込まれ

家中の感冒引受けて母は逝き

笠岡市 木山 遠二

ペンキ屋が一番大衆向に描き

断るも大儀遣る気で貸してやり

駅弁の釣銭より代を出し遅れ

襖の絵見ながらジッと病んで居り

老の日記四五行にして剩すなし

布施市 森下 愛論

後悔を重ねて女成長し

うた声喫茶明治生れを忘れてる

大阪市 河井 庸佑

実力にプラスアルファで入学し

義理で来た祝いと知れるのもまじり

大阪府 谷沢 好祐

出て行けとすぐ怒鳴るのも親ゆすり

鬼が笑うことやった教科書タダ

東大阪市 高津 徹也

吹雪強まる手みやげの生一本

美容院やれ大鵬だ柏戸だ

愛媛県 榎 紫光

ガム噛んで遂に唇盗ませず

指に唾つけ牛売った札をよみ

見舞品お返し考えながら受け

青森市 工藤 甲吉

銭湯へ行くアルミ貨を掻き集め

雪掻きへ男一人を頼られる

淡雪が降ればなまめく灯のまわり

貧乏がつくづく嫌になる吹雪

玄關の雪そのままに二号邸

松江市 小林 孤呂二

喰うことが精一杯ですよと立話

大安で結ばれ働き手ひとり増え

ご近所へ詫びにゆくほど子は育ち

松江市 舟木 与根一

曲線をうまく着ているのもモデル

恩給がつき凡人の貌になり

四畳半ふとんは散った花のよう

卒業をして口答え多くなり

豊中市 林 夢虹

雪国に美しき少女生れけり

雪よりも白き記憶の母の乳房ちち

雪がふる祈る私の手へ髪へ

美しき別れなり雪の彼方に去り行きし

雪へ喚がら捨てしを悔む

西宮市 山本 一傘

どんなご関係ですかとは嫌な感じ

麻雀をすることに決めている土曜

マダムほど世辞も徹底すりや立派

大阪市 今西 生薑

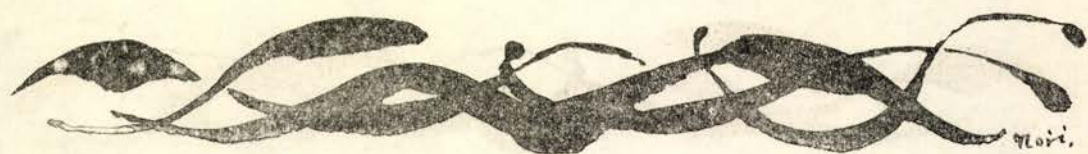
西成界わい(三句)

中学でぐれてパンパン好きでやり

こぼれそなおなか抱えて捨てられる

パンパンの紐が「ヌード」のかぶり付き

京都市 室井 八九寸



文学の名の性描写きたならし
書いたものついぞ見ないが著述業
せずともバイトを酒がやめさせず
顎紐の警備吹雪となつて更け

岡山県 横山 一声

入学の活字へ老眼鏡をとり

お寺さんもお暇なそうで村平和

小松市 関戸 宗太郎

念仏を聞く銭湯の熱いこと

碁仇を軽くあしらうゴルフ場

停年が近い成り歩の廻り椅子

パチンコで雨のあがったのも知らず

追い出した屋台の跡へ駐車され

石川県 高山 涼髪

妻はまだ若い酒をやめと言う

人が見ていようがいまいが父稼ぎ

鷹揚にピアノを値切るふところ手

古着屋の着ている服も破れとり

彼もまた交通事故で死んだのか

美弥市 安平次弘道

名物がかびてて保健所しゃべられ

犠牲者が出れば予算化せぬ役所

政敵の死へほっとしたとも言えず

宇部市 平田 実男

躰には触れずかんきょうが環境が

親ゆずりですよと息子も負けていず

刑事物語余聞

ああうまく行つてくれればなと刑事

和泉市 井阪 東天紅

赤字でもお役所だから手をあげず

うどん鉢皿が溺れて死によつた

道きけば丁寧すぎてなお迷い

諫草市 川岡 靈眼子

宇宙縮まりて時計小さくなり

鉄匂う夜勤がのぞく子の寝顔

人格の座に居て慾をのぞかせる

誤字を見て当用漢字かと思ひ

香川県 石井 夏生

運転手バックミラーの美人見る

年度末どの先生も叱らずに

同舟近詠

須坂市 高峰 柳児

門衛にも握らせ深みゆく汚職

あてやかな媚でOK匂わせる

異端者の知恵また村をかき乱し

不渡りへ豪華なくらし洗われる

和歌山市 秋月 宏方

一日一日生きている人安定所

ビルの谷ここは驚など鳴かず

ほほえみは心に春の風が吹き

三男結婚

よき日きょう秋月丸は船出する

大洲市 米沢 曉明

お眼鏡に叶つたらしい酒が出る

びっくりが仰山すぎて嘘と知れ

墓参りこせこせしない人だった

教養の程度が知れた御挨拶

化粧品生まれつきには勝てません

新居浜市 月原 宵明

麦の笛乳母と遊んだ段畠

桜咲くまでに要求勝ちとる気

本名のいる日曆襖せたまま

公認でそこ迄送る許嫁

労組に徹して三十女生き

関取の口下手それが頼もしい

上田市 金子 吞風

奥さまはここで看護婦してた人

初恋の暗き喫茶の灯に黙す

名古屋市長谷川 鮮山

さつと手を引いた見切りのいい男

満更でないような顔読みとられ

云うことがまだまだあった向つ腹

座談会

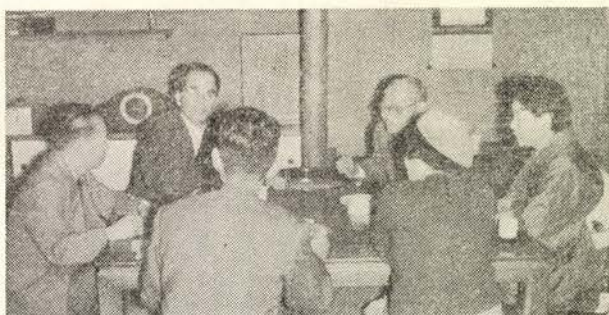
易談縦横

— 会場・中島小児科診療院楼上一 —

一 語 人 々 一
 麻生路郎
 中島生々庵
 松江梅里
 中島小石
 山川阿茶

— 編集局 —

不二田一三夫



(写真説明) 左から一三夫、生々庵、路郎主幹、小石、後向き左から梅里、阿茶の諸氏

路郎「当たると思うね、ということとは易というものは統計学なんだから。正確に統計されたものを正確に計算して判断すれば当たるのが当たり前で当たらぬのが不思議だ。しかしこの場合、易者がその統計を正確に組み立てる力があるかどうか問題だ。云うなれば未熟な選者が佳句を目こぼすようなもんなか。

易医

生々庵「路郎先生がおっしゃるように、易学が数学である以上、易は迷信ではないと思う。話を追って申し上げていくが、江戸時代の初めころは、易医というものがあつたのですよ。易と医はその理相を同じとして、易理により病いを論ぜんとした一群の医家があつたわけです。

むずかしいといえばですね、医家たらんとするものは、上、天文を知り、下、地理を知り、中、人事を知るべく、この三つが明らかで

然る後、もつて人の疾病を語るべし。すなわち天地人三才に通ずるをもつて易医の条件とする。と古書にもあるわけです。

いちいち易を信じて、あすは旅立ちができないとか、何んとかいふのは別だが、たとえば乗ろうとしているバスに乗れなかつた場合、もしあのバスに乗っていたら事故にあつたかも知れない、乗れないように遅れたのは、誰かが私を守つていてくれたのかも知れない。私はときどきそう思うことがある。その守つてくれる偉大なものが、目には見えないが、それはあるいは母ではないか、と考えることもありますね。

(筆者註) 生々庵医傳の親孝行ぶりは有名ではあるが、今さらのように頭が下がる)

阿茶「私は八卦に八卦をみてやりました。

「易医」ということですか。
 阿茶「イヤそんなとは違う。

ある易者が自分の子を医者にしたと言つて、私に相談をしにきたのです。

梅里「易者が、阿茶さんに易をたててもらいに来たわけですね。

(笑い)

阿茶「そうです。

梅里「で、易はどう出ました？

阿茶「易をみたのではありませんが、梅里「易者なんかになるのはやめなさいと言つてあげただけですよ。梅里「脈がなかったわけですね。」

(笑い)

阿茶「医者というものはそう楽な仕事ではありませんからね。

これも易ではありませんが、ピタリその人の寿命を言い当てたことがあります。すみ色判断をやっている人ですが、手の指がヒツ病にかかつていたので、薬をつけてホータイを巻いてキチンとしとかないと、えらい目にあつと注意をしてあげたのに、「すみ色判断をしている私が指に

ホータイなんかしては商売になりませんよ」

と云つてなかなかいうことをきかないのです。

「そんな不衛生なことをしていると、後には体中に病気がひろがるかも知れないし、万一なおつたところで体にカタがのこりますよ。カタがのこるくらいならいいけど、三カ月もすれば死ぬかも知れませんよ」

と、おどしてやったのですが、たかがヒツ病くらいと甘く見ていたやうでした。それがどうでしょう、やっぱり全身に病気がひろがつて、私のほうへ治療にきたときは、もうすでに手遅れでスグある病院を紹介してあげたのですが、三カ月経つたら死にました。

梅里「自分のすみ色判断ではそれがわからんのですな。(笑い)

小石「易者というものは、サテ自分のこととなると、迷いがでてわからなくなるのでしょうかね。

生々庵「そういうものらしいな宿命をひめて手相はしなびゆき

生々庵

女性の運は良人と共に

小石「奥さまは、この道の大家だそうで。

小石「別に易を研究しているわけでもありませんが、四柱推命というものは信じてもいいのではないかと思います。一人です。

からこどもたちに幸いあれという
親心から名をつけるときは慎重を
期しております。

阿茶さんのようにお一人で独立
していらっしゃる女性とは別です
が、妻となってしまうと自分の運
勢がどうあらうとも、良人と共に
ついていかねばならないので、女
性というものは花嫁になったその
日に、その人の運というものが決
まってしまうのではないかと思ひ
ます。ですから内助の功をよくし
良人をより伸ばすようにしないと
自分も不幸になるわけですね。

長男の嫁をもらうときもやはり
性格や相性をみてもらいました。
そのみていただいたという人は易
者ではありませんが岡山から来る
薬剤師で、この方の易学には株を
している人たちの間にも信者があ
るくらいでした。

家柄もよい華族出身という縁談
もありましたが、

「お宅の坊ちゃんには、これが最
高のものではない、もっともっと
ご良縁があります。三十一才まで
お待ちになれば、そのときには最
高のご縁談かならずあります」と
云うのです。こればかりは
親が気に入っても子がイヤだと云
えばそれまでのことですが、

「これこそ最高の縁談」

とは現在の嫁のことでした。親
も子も気に入った嫁で、今もって
ありがたいことだと思つていま
す。

「梅里さんは、たしか仏滅の日
をえらんでご子息のお嫁さんを迎

えられたように聞きましたか。

梅里「そうですね。仏滅の日をえら
んだのです。理由は、易を信じて
ではないのです。仏滅の日なら式
場も空いているし、早い話がです
よ。鯛一つにしても安くつきまし
よ。」

阿茶「そらまた現実的ですね。」

梅里「私の言いたいことは、た
だそれだけでなく、つまりなんで
すな、仏滅という最悪の日に出発
して、そして二人で最良の日をつ
くるよう努力せよ、という親ご
ころもあるのですよ。」

姓名学正田美智子の名もな
らび 文秋

勇敢な貴い人のある丙午 大紅

墮落ちを逃げさしてやる辻
易者 招月

鬼門ということ

生々庵「実験治療」という雑誌
に、大阪管区気象台長である大谷
東平氏が、地相や家相で鬼門の迷
信がのこっていることを全くわ
けないことだと書いています。
鬼門をいいたした本家の中国でさ
え、今日では捨てて顧みられない
のに、わが国ではまだこれにこだ
わっているのはおかしい話だと言
うのです。

「旅竹に魅せられた男」というタ
イトルがついて、ある易研究家の
生活と意見が、日本経済新聞にで
ていたが、この主人公という古賀
尚氏は尾崎士郎の名作「人生劇場
・夢現篇」に横上大吉というワキ
役で登場するモデルなのです。

この古賀氏は三十数年間易修業
に徹している人なのだが、

「占いの技術だけではどうやら身
につけたが、易学の深奥は今もって
かきもく見当がつかない」と
云っている。そして、易など
見てもうのは実にバカげたこと
だと言っている。

「易というものは九五%が常識
で、わずか五%が神のものだ」
とも言っているが、要するにこ
の古賀尚氏は、

「易は常識をもって自分で判断す
ればこつと足りるわけである」
とキメつけています。そしてさ
らに、神秘的な判断に属する残り
の五%についても、それを透視で
きる人は、百年に一人出るが、千
年に入らぬかの大天才だから、
結局は、

「易で判断することは気休めに過
ぎない」と結論しているのですよ。
阿茶「当たるも八卦、当たらぬ
も八卦というわけですね。」

梅里「いまのお話にあった、大
谷気象台長の鬼門について、本家
の中国でさえ今日では信じていな
いのに、日本がいまだにヤン鬼門
だのソレ裏鬼門だとさわぐのはオ
カシイといわれている。そうでは
が、私も鬼門なんてバカ気なこと
だと思つて一人です。」

阿茶「わざわざ仏滅の日を選ん
で婚礼の式を挙げなさる梅里さ
んですもの。」

梅里「私の体験談ですが、終戦
直後ご多分にもれず、私も苦しい

生活の連続でした。商売をするに
も商品は統制でガンジガラメです
し、なすことなく麻雀などで、あ
まり自慢のできない生活をしてお
りました。私はもともと勝負ごと
が好きでしたし、また強かったの
で、あのままなら私は今ごろはバ
クチ打ちになっていたかも知れま
せん。

そのころ、その日は常になくエ
ライ負けましてね、スッカスカ
になって千日前ヘブラリと出てき
たところ、ご承知のあのへんにい
る大道易者が私を見て、

「そこに立っている人、（私を指
して）アンタは強い星のもとに生
れついた、特に勝負ごとなど滅
法強いね」

なにを云うか今スッカスカに
やられてここへ来たのに。（笑い）
と思ったのですがね、その易者が
ドえらいことをそのとき言いまし
てナ。

「アンタのその強い運勢はアンタ
の男性の一部にあるところに、ホク
ロがある。そのホクロがアンタの
強い運勢を立証しとるのじゃよ」
「梅里さんは、そのホクロをこ
存じだったのですか。」

梅里「一三夫さんムチャ言う
なア。あんなこと、どないしてみ
ますね。」

「で、そのホクロがあるかない
か調べるのでしたら、鏡をまたい
でのぞくわけですか。」

梅里「そうやがナ（笑い）」

「みましたか。」
梅里「こつちも好奇心というの

があつて、とにかく調べましたよ
（笑い）」

「ありましたか。」

梅里「ありましたよ、ホクロが
まがいなく一つね（笑い）これ
にはさすがの易ざらいの私も考え
させられましたね。そこで、奮起
一番する決心をしたのです。これ
ほどいい運勢をもっているなら、
なんとかして立ち直って、うるお
いのある生活をしたと、そこで
金光教にもはいり、チャンスのく
るのを待ったわけですよ。」

四十三才の厄年でした。松崎町
（現在の大方割烹の店）に建て売
りの家があつたが買い手がいない、
なぜかと調べるとトイレが鬼門に
あるため、みな敬遠したわけだ
す。私は私なりに、そんなことを
こわがることはない、とその家を





ある日の ふんにようだん

東野 大八

美しくしみどりの五月というのに、甚だびろんな話で恐れ入るが、少々、はばかりのことに書いて書いてみたい。

はばかり、すなわち便所、ボクは人生にとってここほど哀歎切実なる場所はないとつねづね考えている。

軍隊生活をやった人なら、その郷愁の第一は便所である。一つ星の下新兵もトビラを排してここに

入り、カチンと止め金を下ろしたとき、はじめて確固たる人権をとりもどす。ホツとしたところからなる解放感、いかに強烈なるアンモニアの臭気がたちこめようと、それは最早ものの数ではない。この中で食べた大福モチのうまさ、いまだきこらあたりで食べるたべものすべての比ではない。

シノメのストライキ、といううたが大流行した、くるわ情緒はなやかなりしころ、このご不浄の中でよく妓（おんな）が死んだ。死のそのまぎわまで、彼女たちが

ここから泣き、喜び、怒りの感情をぶちまけたのは、この身一つを入れて開かれた一画であった。

「ある人に落籍され、自由の身となっても、はばかり癖は死ぬまでなおりました」

というある老女の述懐を養老院で聞いたことがあるが、まことの感慨はその身になってみないとわからない。

皇居の建築費をたった一万円で落札して全国民をアツといわせたさる土建業界の大御所は、こと機密に属する重要議案を進言される場合はかならず便所の中に収つてときいた。トビラ一枚をへだてての話だが、相手の心情は鏡をみるよりも明らかつたという。

織田信長も便所好きは有名な話だが、殊に人間を始末する「お手打ち者」が現われるとかならず廁に入つた。

「蘭丸、そちはどう思う」

龍臣森蘭丸は、そのたびにキツバリとその是非についてのうけ応えをしなければならなかった。信

買うことにしたのですが、二十五万円だということです。しかし私には十万円より都合がつかないのです。だが相手も、買手がつかなくこまっていたところなので、残金は月二万円あての月賦でもよいと言ってくれました。私の運の開けたのはこの家を買ってからでした。それからトントン拍子でした。

それは偉大なるホクロでしたね（笑い）

梅里—金光さんの教えに、日柄方位は見るに及ばず

使い勝手のよいのがよい家相じゃ

といわれています。

生々庵—私も別に方位を信じるというのではないが、なにか、そんなものがあるのではないかと、思ったことが若いころありました。それは学校を出てまだ医者の特マゴの時分でした。

コドモさんが伝染病のエキリで、早く入院させないと危険だと言ったが、どこか家庭でもそうであるように、そのころはやはり入院させずに自宅療養をねがったのです。だが警察のほうでは許さないので、とにかく私のいる病院へ入れたのですが、はじめに四十八時間があぶないといったのに五十八時間経っても死なないではないか、とヘンな言いがかりをその家人がつけてきた。（笑い）

だが患者の熱は下がらなかつた。この患者の祖父にあたる人が、この病院へ入れることを初め

から反対していたようです。というのとは方角がわるいというのです。だからどうしても連れて帰りたいのですが、さっきもいうとお警察が許さないから、それでは病室だけでも方角のいいところへ移してくれとときかないのです。そこで仕方なく病室だけ変えることにしたのですが、今まで熱がすこしも下がらなかつたのに、病室を変えてから急に熱が下がりました。

（笑い）

その祖父さんの得意や知るべしでした。ね、さあこんどは、どうしても自宅療養をさせると、しつこく云いだしたので、まあ患者もだいぶ快方にむかっていたので退院させ、私が当分往診することにした。

「先生、医学もなんですが、方角ということもバカにならんでしょう」

と、当時最新の医学を学んで社会へ出た若い私には、やはり科学をもっと高いところにおいていただけに、方角など問題にしていなかったが、入院時代に熱が下がった、何か目に見えぬものが肉親の愛情による、いわゆる「神祕」というものには全然否定できないものを感じられました。事実、母親の愛情によって、わが子の病気を全快させたこともありましたが、それ。

その後、そのコドモさんは結局寿命がなく死にましたが、驚いたことには、そのコドモさんが、何年の何月何日の何時ごろ命あやぶ

しということを、この祖父が予言して、それを書きつけていたそうです。その書きつけが仏壇のひき出しから出てきたというのをきかされましたが、そうした「神祕」なことがらのあることは信じてよいのではないかと。

それからもう一つ。私の九州の家のことですが、最近ドロボウがはいったろうとか、この部屋はいけないとかいうのですが、そのわるいといわれた部屋には事実病人がねていたり、実によく当たるので気味のわるいおもいのしたことがありました。

母一人方位の事を言い立てる

来るはずの福を易者は見えない

苦笑い易者から手を取り戻す

辻八卦近頃汚職の顔も貼り

易ブーム

—路郎主幹をはじめみなさんは、どうやら易の神祕というものには、真向から否定されてはおられないように、わずかに梅里さんは否定の態度をとられました。それで例のところのホクロにはカブトを脱がれましたので、やはりこういうところに今日の易ブームの何がひそんでいるように思われます。

浅野八郎著（手相術）が29万部、黄小娘著（易入門）が45万部突破という記録がでています。新聞も三流紙は運勢のスペースを相

長の処生親は、人間万事トコトンまで行ったところに、本当の人間の意識が真実を裏づけて存在する、とつねづね考えていた、と信長通はいう。羽柴筑前守といわれるようになった木下藤吉郎は、草履取りからの立身だが、エラクなつても妙に信長と気の合っていた点は、寒夜に草履を懷ろにして主人を待ったという、そうした人間の肌合いがどこかに生きていたからだろう。そういう点を考えると、便所問題をアタマから毛ざらしたのが明智光秀かも知れない。往時の知識階級で、利権者のウツサ高い鼻筋の通った光秀自身にも、およそ則と縁遠いムードがあったことにちがいない。信長はそこを嫌った。

便所とめしの長い男は出世しない、なんてことはよくきく言葉だが、人間万事生れてから死ぬまでこれだけは縁が切れない。食って出す、人生とはしよせん、この二つの後やさきの問題といえはちと行きすぎだろうか。

便所の中で考えごとをしたり、靈感がヒラめいたりするのは、リキむ、つまり腹圧をかけることによって生じる一時的充血、つづく排便の快感、ここに抑圧と解放の相互作用がある。モヤモヤの消滅、そこには地についた安心感がつきもので、われながら「アゴ」をなでる妙案も生れようというものだ。

他人様の家に出かけても、掃除のよく行き届いたばかりは気持ちがいい。その家や家人のすべてが一気によみとれる。東京へ出張し

た際、政界のある大もの家の便所を借りた。すると一輪の花がそこに置かれてあって、右隅にはタバコ盆がある。鼻の先にはエンピツをブラ下げたメモ帳がある。こういう舞台装置なので中はひろびろとしていて、一人だけでいるのが勿体ないような気がした。

「やっぱり先生のようなお身体になるとお暇がないんでしょ、ね、メモまで用意されてあるとは……」

と秘書先生にいったら

「先生のところへよくおみえになる元大臣は、はばかりの中にトランジスタラジオが壁にとりつけてありますよ」といった。

ボクが若いころ、あるアパートに住んでいたが、この便所は三階から一階まで見通しで、時にはお尻から離れたカタマリがスーとすずしい風の中に吸い込まれるように消えていく。

「まるで爆撃機に乗ってバクダンを落した気分だよ」と友達に語って、一度うちへきてやってみろ、と自慢した。

排便は高きをもつてよしとす。下宿の二階の窓や、溪流足下にいとほかなる橋上になつてこころゆくばかり用を足すとき、心気のそう快これにすぎものはない。

あんまり調子に乗って書きすぎると、これを読んで頂くおたふさん、に気の毒です、まずはこの辺でどうぞお手をお洗ひになつて下さい。

当重要視して割いておりますように、易ブームはまだつづきそうです。

路郎―最近不朽洞会へはいった諫早市の川岡霊眼子氏が近くにいらると、きよの座談会に出席してもらえたのに、九州ではちよつと遠すぎる。

今日でもちよいちよい逢つたが、以前私の家で食客をしていた富樫クンが、天満の易断宮崎八十八氏に師事していたころ、私が毎朝徹夜で眠っている枕もとで、例の六本の算木をバチバチやるんだが、あれをやられるとスグ目を覚ましてしまうので弱ったが、なかなか熱心なものでした。

小石―私は四柱推命だけは信じてもよいと思っています。人間の姓名は重要な役柄をもっているように信じています。

阿茶―人その環境によって、人相が変わるといわれていますから人相学というものも軽視できないでしょう。

梅里―死んだ豆秋さんは、大方へ投句する日を大安の日にきめていました。

生々庵―たびたびくりかえすが、そういうものがあるのですよ。きょうも路郎先生と二一緒でしたが、府の文芸懇話会へ出席したのですが、久保田万太郎氏のおはなしが樋口一葉の苦境時代のことでした。

正月を迎える暮れの十二月二十七日に、一葉の亡父が借金した二円五十銭を、かつての部下だった

人の老末亡人がとりに来た。さあ困ったことには、ひっそらえれば二円五十銭はあるのだが、それを払ってしまふと正月の餅代等がなくなるのですね。だが一葉が送稿してあるところから原稿料が届けば別に苦しむことはないのですが、それが年内に来るか来ないか、これがわからない。

ここで一葉もその母も、その金を払うべきか待ってもらうべきかと迷うのです。こういうときに原稿料がまにあうかどうかを占ってみたい気持ちに追いやられると思うのです。

結局はその老末亡人に返金するのですが、その日はちょうど一葉の亡兄の命日だったので、その老末亡人にも心ばかりのご馳走をして帰らすのです。そのとき郵便がくるのです、ひよいと見ると、それには原稿料を渡すからスグ取りにこいとあるのです。一葉母子のよろこびは大きかった。

そのとき「自然はかくも円滑なるものか」と樋口一葉が言ったというのです

私はこの「自然は

かくも円滑なるものか」という名言に接して、私の考えていた人神秘的な、なにかがあるVというところを再確認したわけです。

路郎―なかなか有意義なおはなしを皆さんからいただいたいてうれしく思います。

国家でも、あの日露戦争当時あの敵を向うにまわして、勝てるかどうかと迷ったときは、やはり易のようなものに願いをこめたというのでした。

梅里―それで日露の戦エキというのですな。(笑)

―イヤどうもこれはゴリッパなサゲをいただきます。ではこのへんでこの座談会をおわりたいと思います。

(カメラ・林宏子)



ビールは
ASAHI



おかる

富士野鞍馬

浄るり芝居一の「仮名手本忠臣蔵」では、おかるという美人が、ロマンチックに登場する。このおかるは、作者竹田出雲がこしらえた人物であるが、その根拠が全然ないわけでもない。おかるという人物は実在したのである。しかし事態はちがっている。

大石内蔵助が山科閑居のとき、元禄十五年一月に、京都寺町二条の二文字屋次郎左衛門の娘、十八才のおかるというのが、小間使いとして採用された。

その年の八月に、大石は、江戸へ下る準備もあって、京都京極、金蓮寺内の梅窓庵に移った。そのときおかるは、暇をとって実家へ帰った。間もなく大石は江戸へ出立となつて、おかるは、涙で大石

と川柳に詠まれている。

塩谷判官が殿中で、高師直に切りつけた時には、おかるは腰元であつたが、近習の早野勘平と恋して、ちちくり合つていたというので、

主人の抜く頃勘平突いている
(タル九五)

主人相知らず勘平色狂い
(二五〇)

と詠まれ、「抜く」は判官の刀傷で、「突く」はおかるとやつてゐることをいつたのである。また

きらわれる主も家来も横恋慕
(タル五〇)

という句がある。師直の家来驚坂伴内は、おかるに惚れていたとも作られてゐる。

勘平との恋愛は、お家の法度というので追放となり、勘平と道行ということになる。

そして、山崎の与市兵衛のそこへ落つき勘平を婿としてくらし居た。

ところが、大星はじめ浪士の面々が、仇討のため結束して、連判をしたが、不始末で追放になった勘平は、それに加わることもできず、思案の結果、おかるを祇園町に身売りさせて加盟金をととのえ、

朋輩にたのんで、連判に加えてもらうことに決心して、おかるも得心したのであつた。ちちくつたむくひでおかる祇園町
(タル五〇)

女房を売るは忠義の六段目
(二二)

田楽で祇園にかはる六段目
(九九五)

と、「仮名手本」六段目に作られてある。それで、祇園町の一文字屋の内儀が迎えに來て駕でおかるを連れてゆく、

迎ひ姫女房泣くなく祇園町
(タル五〇)

ということになる。そしてうられてもやっぱりおかる名をかへず
(拾九)

うられてもおかるやっぱりおかる也
(タル九五)

毛せんへ乗つてもおかる名を替へず
(二五〇)

傾城の名にお軽とは四六めき
(二二)

と、本名おかるで女郎に出たのである。「四六」とは、夜四百文、昼六百文の私娼見世で、深川などにあつた、それをいうのである。

椎茸が川竹にある一力屋
(タル九五)

腰元で居たときは、椎茸タボの髪に結つていたが浮川竹

の憂き勤めとなつた。「茸」「竹」の語呂合せの狂句である。

「仮名手本」七段目は、祇園一力茶屋の場で、おかるが派手に登場する。

わたしやおまへに盛り潰され、あんまりつらさに酔醒し、風に吹かれて居るわいな
(二二)

と二階から由良之助に答える。

風に吹かれてゐるわいな女護島
(タル九五)

おかるは風に吹かれる赤頭巾
(二二)

と、そのセリフを取つて詠まれている。「女護島」は、南風にあたりと孕むといわれ、「赤頭巾」は痲瘡のマジナイである。

そこで縁側で、由良之助が読む手紙を、おかるは手鏡を出して写して、それを読み取るのである。

二階にて読み取る文字は左り文字
(タル五〇)

のべ鏡すかしてくさい文を読み
(タル九五)

その間に、おかるは、ちり松葉のカンザシを落とす。

七段目風にふかれてちる松葉
(タル九五)

繰返す文にびっくりこぼれ松

(「五〇」)

縁の下には九太夫が忍んで居て

銀ならばいいと九太夫手をの

ばし

(タル五〇)

かんざしは忠と不忠の間へ落

ち (「二」)

と詠まれている。

それから由良之助に梯子をかけて降りてこいといわれ、そこで洒落たセリフとな

り、
「あほういわんすな、船に乗ったようでこわいわいな

「道理で船玉様が見える

「おのぞかんすないな

「洞庭の秋の月様を拝み奉るじゃ

それを川柳はまた洒落て、

七段目梯子で拝む船後光

(タル一一八)

船玉は出しても得手に帆はかけず

(タル九五)

ばかりしい裏門だよとおかる

いひ (「二」)

出していいおかるが蟬に手は出さず

(「二」)

と船玉を詠み

秋の月梯子の下で由良拝み

(タル五〇)

洞庭の月を大星見ておやし

(「二」)

洞庭に近星の出る七段目

(「九五」)

と「洞庭の月」(中国の名所)も詠まれている。それから由良之助が身受けするとい

う。

かんざしが仲人をする身うけ

也 (タル五〇)

そこへ兄平右衛門がたずねて来る。そして父与市兵衛、夫勘平の死んだことを知らせる。

かわいやなんにも知らぬなッ

笑つて (タル六九)

おとしのうへなどとおかるも

不孝もの (「九五」)

うぬほれば逢たかったでござ

んせう (「二」)

この時のおかるのセリフは

「勿体ないがとと様は、非業

の死でもお年の上、勘平どの

は三十に、なるやならず死

ぬるのは、さぞ悲しかろくち

おしかろ、逢いたかったであ

ろうのに……

というのである。

平右衛門は、おかるが、大

星の読む手紙を鏡にうつして

読んだのは、身請けといって

命を召されるものときめて、

自分の手で死んでくれとい

う。

平右衛門妹にひどい無心也

(タル五〇)

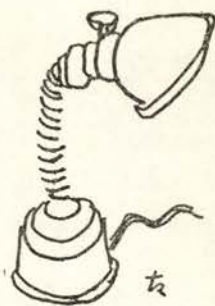
そこへ由良之助が出てきて、

「心底見えた同志連判に加え

る」というので、平右衛門もおかるも大喜びということになる。

軽い身でおもい一味の数に入

生活の展開



女

出張指導あれこれ

川村好郎

り (タル五〇)
また清元では、お軽、勘平の道行を「落人」として作られ、一幕芝居になっている。

数カ月前、久しぶりで夕方戎橋

筋から心斎橋へブラブラ歩き廻

た。戎橋の近くを歩いている時に

北の方から三十前後のまことに垢

抜けのした婦人が近よって来た。

一見女人にも見えないきな着こなし

であるが素人らしいところもあり、

とにかく髪型から着物の好み

から、とても東北郡高石町方面で

はお目にかかれないうすが大阪下

真中には、こんな別嬪で上品な女

もいるのかと、年甲斐もなく私は

見とれていた。すると彼女何と私の

真前に近づいてくるではない

か、しかも微笑みながら、アラッ

と些か驚いた。勿論一面識もない

婦人である。私の顔を見ながらソッ

と隣寸箱をくれた。見るとその

隣寸の小箱には「〇〇アルサロ」

と書いてある広告マッチだった。

帰ってしらべるつもりでなく隣寸

箱をあけると、中にその小箱より

も小さい名刺が入ってあって「〇

アルサロ波奈子」としてある。

つまりまずアルサロの女給の中で

これという美しい魅力のあるもの

を選んで、目抜き街頭へ進出さ

せて、アア別嬪だなどと、第一印象

象を与えておいて隣寸を渡すの

で、あれがアルサロ〇〇の波奈子

というのか、同じ飲むならあの〇

アルサロへ行つて、波奈子を指

名しようという気にさせるので

す。

競争激甚なキャバレーの経営者

は如何にして客を吸引して儲け

るか、その商魂のたくましさを感じ

心した。残念ながら金もなければ

それ程浮気者でもありませんので未だ、波奈子女史の姿に接しません。

如何にして金を得んか、名譽地

位を獲得しようかと追いかけて廻す

ことは大切なことであり、毎日そ

の事に血まなこに皆なっているの

で少々の不義理不道徳も顧みない有

様です。

或人がこういうことを云ってい

ます。金は一名「おあし」とい

う。即ち金は手も顔もなく全部が

「おあし」足である。そのおあし

を手も顔もある人間が追うても、

とても速さにおいて追いつけれ

ない。フーフー息を切らせてふら

ふらになるだけだ。逆に人間にそ

の「おあし」を追いかけてきたら

どうだろう。必ず追いつくにちが

いない。金を追うより金に追うて

もらわねばならぬ。あの人は大切

にしてくれる。いいことに私を使

ってくれる。皆のもの同じ使われ

るなら、何とあの人のふところへ

行こうじゃないか。となればどう

だろうかと。

金、名譽、地位を真向からすが

りつこうとする態度も必要です

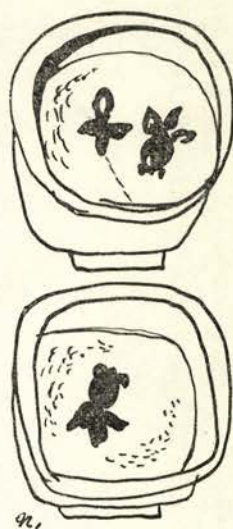
が、ただそれだけがそれ等を得る

道ではない。樹にしてもただ横へ

延びよう、空へ延びようと深く根

に力を入れることを忘れては遂に

は倒れてしまう。



窓 口 談 義

麻 生 路 郎

ある柳人は川柳を作る、或るいは創ると云っている。ある柳人は川柳を生むと云っている。ある柳人は川柳を書くと云っている。そのどれが正しいのか、正しくないのか、きうきよくは一緒なのかおそれくそれは、その作家の作品に對する態度でまざるのであろう。

何れにしても安易に作り、生み、書いた作品がよりそうな者がない。しかし苦淡をきわめたからといって必ずしもいい作品だとは限らない。

苦淡に苦淡を重ねて、ある壁を衝き破って、はじめて後世に遺るような作品となるのである。又、平々淡淡とした態度で、はじめて天衣無縫の傑作となるのである。要するに安易な態度で作句して佳

水上氏は旅館らしい部屋で机の

上に原稿紙をおき、ハチ巻をして寝ている。次のページの自宅の書斎では、奥さんがテープレコーダーをそばにおいて、ご主人が電話で送ってくる原稿を録音している。もちろん演出写真だが、これが「私が発明した水上式電送原稿である、嗚呼」と説明文がついている。

黒岩氏のは奥さんの運転する車の中で、飛行便で送る原稿を書いている写真だ。

「女房に運転させながら、僕が横で原稿に手を加える、ということも再三ある」

これが新時代の流行作家の新執筆様式かと感心したりうらやましがったりする読者もあるかもしれないが、あててはいけない。小説というものは、そんな方法で書けるものではない。小説が精神の密室の中の作業であることは原子時代であらうが宇宙時代であらうが変りはないのだ。作家にも才能の開化期または爆発期があるから、ある時期には、こんなやりかたでも一応通用する短篇の五編や十編は書ける。だが、絶対に続かない。論より証処、同じ雑誌にのっている黒岩氏「女予言者」はカサカサでガタガタのただ活字をならべただけの駄作だ。水上氏の「放浪歌」が「アンデルセン自伝に挑む力作」だなどとはとてもない。出世作「雁の寺」でひらめいた妖

桜は桜なりに梅は梅なりに根を張り深くなることによって、自ら枝葉が延びることが出来る。私はこの生き方を生活人生の展開と云いたいのです。

私はとても金や名誉に好かれそうでなく、そんな話は出来ないが、最近まことにあつかましいことだが川柳指導に二三カ所へ行つて共に勉強していますが、そこにこの生活の展開ということをお教えられたので、少しそのことを申し

てみようと思う。

×

三年程前に中島生々庵氏宅にて不朽洞会の常任委員会が開かれた。その時羽曳野市の大坂府立羽曳野病院の中に、どんぐり川柳会があって、これまで丸尾潮花氏、北川春葉氏が指導されていたが、先方からは是非誰か指導に来院してほしいという希望があるので誰か行って中絶しかけていた川柳を、出張指導しては如何という話が出た。そしてはからずも私がその役を仰せつかった。その時は快諾しなかったが、すぐどんぐり川柳会から依頼の手紙が来、打合わせに是非来てくれという事になり、遂に毎月一回日曜午前中に出張することになった。

さて一回二回出席して私は自分の健康のありがたさを感じた。療

常には公私多忙を極めていると健康のありがたさを忘れ勝ちで、つい忙しい事に不足が出てくる。私は月一回この羽曳野病院に来ることに

しい光彩は跡かたもなく消えはてた貧寒文章である (目)

以上の全文を読まれた時の読後感はおそらく筆者(目)氏と同じように、あきれたことであろう。小説のように長い文章の連続と、川柳のように、僅かに十七音字中心で創作するものとの比較はムリかとは思いますが、私に云わせれば、やはり、この流行作家式様式では、いい意味の川柳作品は決して得られるものではないと思う。

西鶴がその首、住吉神社前で俳句二万句を吐いたとか、現代では大木教の王仁三郎が短歌一万首を詠んだとか伝えられているが、それらはテープレコーダーで送ったり、自動車の中で作ったものではない。それすら作品が傑作として遺っているのではないことは言うまでもなからう。

短詩型文学は金にならないとよく云われる。多くの時間を費いやして、創作しても、これを原稿紙に書くと、タッタ一行にしかならないからである。

川柳は金にならないと、最近の「伊勢物語」誌で藤馬氏が述べていられたし、「きやろ」だつたと思うが藤馬氏も書かれていた。たしかに現在のところ、短詩型は生計を支えるだけの対価にはならないことは事実だ。

曾て、世界的詩人のエドモンド・プランデン氏も英国では詩で飯を食っている人はいないと云われていた。詩人は日本と同じで、太い教師が役所勤めをしていると云われていた。しかし、俳人では

虚子は立派に俳句が金になり、俳句で飯を食っていたと思う。その外にも俳句で飯は食えないまでも、いくら金になつていいる人はあると思う。

その点から云つても、川柳だつて、金にならない筈はない。金になるような句を創らないのではない。金になる句必ずしも、名作だとは云えない。

私が「川柳雑誌」の巻頭に毎月発表しているような句はたしかに金にならない。それでも私は創作し続けている。句は金になるのが最終の目的ではない、と云つて、人生にとって何等役立たないような句だつたら、青竜刀氏のいう、紙とインクのムダ使いに過ぎない、

私たちは、金にならない句をウソと削つていいのだ。しかし、それが安易な作品であつてはならない。ある作家は車中で作句すると云つていたが、そんな作品がいい作品であらう筈もないし、金になる作品であらう筈もない。

私が若し、始業駅から作句をはじめたとすれば、終業駅に着ても気付かず、折り返して始業駅に戻つても気付かないであらう。そしてその時の句必ずしも名作と限らないのであるから、私は車中では句を創るべしにしている。私の作句時間は朝か夜である。

作句時間は人によって違ふであらう。しかし、通勤時間を利用してなど考えることはなかなか骨折りに過ぎないと思ふのである。小説は密室中の作業である

(目)氏が云つていいるように、作句も亦密室中の作業である。と云つたところで密室を狭義に解釈する必要のないことは云うまでもなからう。

私も金になる川柳は幾らか作っているが商売人やサラリーマンの収入には追つかぬだけである。だから自慢にはならない。

近ごろのいわゆる大家の作品を見ていいるとウンとレベルが落ちていいる。これには二つの原因がある。一つはお年のせいである。何を見ても感興が湧かないのである。情力で作つていいる感が深い。

もう一つの原因は後輩の句や新開柳壇の選にわずらわされ過ぎていいる。

これはいわゆる大家として、責任上やむを得ないのであるが、選者ならぬ作家としては気の毒だと云えば云えぬことはない。それを防ぐには投句家がよりよい作品を選者の手許へ送り込むより方法はないが、それは云うべくしてなかなか行われにくいものだ。

若山牧水氏も新聞の歌壇の選にはなやまされていたと奥さんが、どつかに書かれていた。

そんな選者には私は名句の抜き書帳を作つておいて選後に必ずそれを読んで洗脳することをすすめていいた。

ある。

かくしてこの川柳会から退院さ出れる。これはありがたいことだ、川柳を教えるに來ると共に、健康を教えられると爾來今日まで僅か一回欠席しただけで、毎月喜んで出席していいる。

約一年半程して常に二十五六名句会に出席されていたのが、だんだん退院されて、二三人になつて仕舞つた。

この病院は比較的軽症な人々なので、一年もすると退院されるのでいつも川柳の一年生を指導するようになる。

そこで幹事の人々が少人数にわざわざ来院してもらつたのは気の毒だから、静臥の人々の句と共に句を送るから、添削選をしてほしいと申出があつた。

しかし私は自分も教えられていいるので、もう来てもらわなくてもよいと断られるなら已むを得ぬが、たとえ一人になつても参りますと、翌月からまた出張したがそれからだんだん増えて遂に一回の休会もせず、今日に至つていいるのでこの時はお互に一つの試験であつたと思う。

かくして同病院には俳句、短歌、詩などの会があるが、三年間指導者が欠けず出席していいるのは恐らく川柳だけだろつと思ふ。それは私が健康を感謝する絶好の日と信じて実行していいるのでむしろ私が皆様に感謝せねばならぬので

かくしてこの川柳会から退院されて一層川柳に精進する方が次々生まれ、東天紅、尚史氏は既に不朽洞会に入会し各支部にも出席し上手になつてこれ、東天紅氏は一昨年川柳まつり特別課題に第一席を獲得し、浜寺支部へ優勝旗をかざつた。

其他天悟空、裕邦、凡子、一峯、泉洋、雄峯等「川柳雑誌」にも投句していられる。東天紅氏は嘗て私に

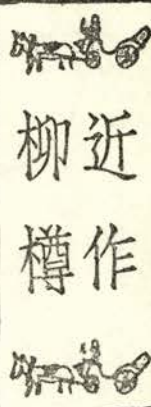
「いいこと教えて下さつた。病氣は全快するし、仕事にも面白味が出てきたし川柳のおかげで楽しい日を送つていいます」と語つていられる。いずれこれ等の人々と同窓会を開催する予定をしていいます。現在毎月句会は出席者だけで二十名を下らず其他の投句者を入れると三十名以上の人々が楽しんでられ、私の手元へ毎月これはと思ふ程句が集つて來ます。

私はこのように盛んにしよう、喜んで貰おうと努力したのでなく私が感謝して出席していいる中に自らあらわれて來たのです(未完)

お知らせ

バックナンバー入用の方は、往復ハガキでお問合わせ下さい。

川柳雑誌社



麻生路郎選
北川春巢選

少年を受験番号とりかこむ 福岡市 田口 麦彦
軟体動物となり停年をつとめあげ 同
金貨抱いて墓場にたどりつく人か 同
つとめ人根性おんなを眼で犯す 同
ゴルフ焼けて団交に立ち向い 同
バツジつけていのにんげんとわかり 同
経営学講座へゴルフの疲れ出る 同
はんこ行政わかつちやい 兵庫県 貝塚市 杉本 一鶴
子を知らぬ乳房のかたさ哀れとも 同
電柱へ身をかわしてとばされる 同
神風タレントへ同情するベッド 同
給食のパン持ち風邪の子見舞わ 神戸市 波多野 美由起

口紅をやや濃く病後出勤す 同
無駄金を使わん主義です冷たすぎ 同
試される見合思えば腹が立ち 同
背景の猿のポーズを待たされる 枚方市 宮川 珠笑
無理してるサイフ見抜 いる デイト 同
靴はいているのに話むし返し 同
すばらしい夕焼け会議まだ続き 同
柏原厄除八幡へ詣る 二句 同
いい稼ぎスリもお祈り申すなり 兵庫県 河原みのる
厄神も一年だけの保証にて 同
百姓を惑わす講話また聴かせ 同
死亡欄年令を調べる癖がつき 同
取的の明日を夢見るチャンコ鍋 福岡市 山田 常楽
大阪駅で故郷の新聞捨てられる 同
手洗で湧くアイディアを笑らわ る 同
故郷がもうちらついて書く荷札 同
同伴で来るぞと静けさ御氣に召し 竹原市 大洲大八洲
小菜一つ流れて川も春の色 同

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
自信の句一句 (一〇) 川柳以外の
趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
川柳に手を染めた年月

(129) 光武弦太朗

(一) 光武源太郎 (二) 光武弦太朗
(三) (四) 長崎県佐賀郡
浦町本村六五〇番地 (五) 大
正7年2月14日 (六) 佐賀県鹿島
市大字納富分二九三八番地 (七)
内科小児科医師 (八) 郷ノ浦一五
六番 (九) かたつむり全連力でこ
ざいます (一〇) なし (一一) 有
(一二) 昭和二十三年頃、平田の
ぼる氏の手引きによる

(130) 山村都ね尺

(一) 山村常次郎 (二) 都ね尺
(三) (四) 函館市恵比須町
九番地 (五) 明治26年8月1日
(六) 滋賀県 (七) 贈物・洋品
(八) ②九九三三番 (九) 親指へ
親指を置く経机 (一〇) 俳句から
色々 (一一) 有 (一二) 大正二年
三月

(131) 森 里 魚

(一) 森 信 (二) 里魚 (三) ー
(四) 函館市東川町七ノ一 (五)



押売りが断り切れて世帯染み	同	独身寮へ帰れば招待券が待ち	大阪市	西本 保夫
零落の庭へぼたんが咲きほこり	同	見学団女の城も見えて通り	同	同
型決めただけで流感お手を上げ	兵庫県	ビル入りの塩しか知らぬ新家庭	同	同
大学を出て牛飼えば記事にされ	同	補聴器の感度を上げる良い話	京都市	大久保 和二郎
予算とるだけの手腕で課長補佐	同	春夏秋冬床を固守さす軸が襷せ	同	同
どないやと色気たしかめあうも年	同	貸し借りの無い手枕を覗く月	同	同
お手伝いさんのカゼにお邸お	伊丹市	美しい奥様やつぱり子を叱り	竹原市	山内 静水
この邸お前にやるよの孫二歳	同	老母の眼に貪乏勝手にしてるよう	同	同
手に負えぬようになれ孫を抱き	同	これっぽっち持たせて浮気す妻	同	同
大学を出ても子を産み米をとぎ	鳥取県	リバイバル馬車馬だったのに風付き	青森県	木村 涼人
五十年歩いた足をもんでやり	同	正眼に構えたまんま四十過ぎ	同	同
ブタ箱を出て自家用車乗って去に	同	積木にも似たる我が家の屋台骨	同	同
目の下のたるんだ顔でハイヒール	和泉市	値にほれて買う客ばかり填輪の美	大阪市	板倉天悟空
回数制おにぎり片手にダンブカー	同	鴈治郎だけが役者のような祖母	同	同
喰うために猛獣さえも芸をする	同	お雛様桃の値上り知らぬ顔	同	同
退職をすれば女房に死に別れ	兵庫県	スピッツが朝の散歩をさせてくれ	見島市	伊丹柳瓢子
おこたの番して背中にかいろ入れ	同	はげているおつむへ理髪	また値上げ	同
ベースアップとさだかん小そうなり	同	家柄を云うて貪乏板につき	同	同

味のコーヒ

モダン

川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



- 明治27年11月6日(六) 島根県浜田市(七) 薬剤師(八) 函館②二九一八番(九) 高野山草一莖も仏の座(一〇) 写真・随筆(一一) 有(一二) 大正九年六月
- (132) 櫻川 不水
- (一) 北坂一夫 (二) 桜川不水
(三) — (四) 下関市東大坪四町十八ノ十一 (五) 明治30年11月11日 (六) 熊本市(七) — (八) — (九) カマキリにまさか虎徹も抜かれまい (一〇) 家庭菜園 (一一) 有 (一二) 昭和五年
- (133) 山本 芳伸
- (一) 山本芳伸 (二) 山本芳伸
(三) 麦一・正光利守はか五六あり (四) 高松市瓦町二丁目八一七 (五) 明治42年12月26日 (六) 淡路島東浦 (七) 香川トヨタ自動



救急車ああ左様かと驚かず	津市	嶋野ひろし	腹決めるのに十円のうらおもて	羽曳野市	島田 雄峯
讃美歌の口でこねてる反抗期	同	同	スキー林立人情の隙間なし	同	同
孫の手を土産孝行したつもり	同	同	絵の批評するが鼠もよう描かず	笠岡市	谷本鈍愚坊
自衛隊に埋立させている平和	竹原市	杉原 愛鳩	天眼鏡骨抜く手相見付けたり	同	同
花嫁の気兼ねがとれた水使い	同	同	未亡人小唄でしゃんと立って居り	芦屋市	里田一ン十
かすりきず程へスターは記事にな	同	同	お隣の普請で初音聞かぬ春	同	同
厚化粧笑い方までかえて来る	大洲市	横田 放人	漫画の世界はすでに宇宙戦	貝塚市	千石 快人
ピーナツの残りも土産母の旅	同	同	婦長以下総なめにするA2型	同	同
出勤のラッシュに生甲斐感じとり	同	同	麦畑宅地にかわる最後の穂	大阪市	藤富 淀月
病院の友から風邪の見舞いが来	西宮市	樋口 寿栄	仏像にゆとりの見える応接間	同	同
電化して夫の用事多くなり	同	同	荒れし墓地大阪の値で見つもられ	貝塚市	護川 梢月
無礼講になって課長は小そう坐し	同	同	金の無い恋は愛情疑われ	同	同
麻雀の支度女房の誕生日	西宮市	白石 良圭	人間の弱さ開業へまねき猫	神戸市	吉田 隆史
母訪えば婦人会の温泉にしたり	同	同	美青年欲の無い故阿呆にされ	同	同
くたくたに揉まれて花を賞めて去に	玉野市	小谷 仙山	春風に流されているバスの列	京都市	都倉 求女
満場一致隅の不服が無視されて	同	同	病院のどの道行ってもある菓子屋	同	同
目鼻だち体臭までが母に似て	新町浜市	小林 孝正	御子達はなごときかれる歳となり	布施市	久米奈良子
胃の手術勧める人は切つとらず	同	同	もの云うが如く拓本出来上り	同	同

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番

車KK経理課勤務(八)高松②七一五番(九)なし(一〇)読書(一一)有(一二)昭和七年

(134) 深田 白扇

(一) 深田治郎(二) 白扇(三) 梅崎二男(四) 新潟県糸魚川市大字栗倉海川第三発電所(五) 明治45年7月5日(六) 滋賀県神崎郡永源寺町大字山上一七五(七) 電気化学KK職員(八) 糸魚川七〇三番(九) 巻ずしの素直さ庖丁次第なり(一〇) 将棋五級(一一) 有(一二) 昭和四年

(135) 木村 水洞

(一) 木村臣利(二) 水洞(三) (四) 大阪市東淀川区十八条町二丁目二一(五) 大正3年7月20日(六) 大阪市浪速区下寺町(七) 公務員(八) (九) アルコール切れると養子らしくなり(一〇) 碁・将棋(一一) 有



笑わねばならぬ社長が駄洒落云い	大阪市	三輪九文銭	花言葉知らず焼芋囃じる恋	同
心中をするのに女バーマあて	同	新世帯猫の額の畑をすき	出雲市	中川 晃男
鳩ポツポ同窓会でリバイバル	愛媛県	これがまあ家を流した春の川	同	同
乗遅れしたので時計修理する	同	段島作らぬ人がきれいがり	今治市	越智 一水
雛祭り手伝う方が悦に入り	芦屋市	義夫氏高知へ栄転	同	同
いさかった心も和むすみれ花	同	再会へよさこい節が板につき	同	同
借金も信用のうちまだ借る気	香川県	故郷よし豆腐の汁の朝を賞め	広島県	山田スミ子
檢察庁壁の色からうす暗し	同	馬鈴薯を植える頬へも春の風	同	同
内気よし内気は困まるバーマダム	大阪市	学校の前にヌードのピラを貼り	兵庫県	常岡 孝風
紐じやとて震喰うては生きられず	同	二重帖簿こさえ善人づらでいる	同	同
此処だけは値切りも出来ぬ入学金	岡山県	原子力時代ロソク買うておき	大阪市	山田 蛙水
制服を脱いだ我が娘に春の色	同	理科時間雄と雌しべにもの足らず	同	同
憲法は平和番犬武装する	愛媛県	ひき逃げが無免許という恐ろしさ	七尾市	松高 秀峰
灸すえて草餅好いて母達者	同	紅一点手酌をさせぬご愛嬌	笠岡市	佐内 隆文
流恋が峠を越して医者寝込み	大阪市	悪筆も派手な色紙にたすけられ	大阪市	井石 泰泉
わざわざに辞めた会社の横通り	同	卒業の写真で見合も事が足り	高知県	山川 勝子
子のはしゃぐ衣裳へ	愛媛県	吸がらが溜って風邪も癒って来	大阪府	見本 泉洋
夢好きの虫もいる世に嫁きおくれ	同	ワイワイガヤガヤ呑む	八尾市	吉田 博一
この人も孤独こころを覗かせず	大阪市	三ッ編にして二つ三つ若う見られ	西宮市	鶴飼 鮎子

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

(一二) 昭和九年

(136) 磯野いさむ

(一) 磯野 勇 (二) 磯野いさむ
(三) (四) 大阪府大淀区豊

崎東一ノ四六(五) 大正七年八月
28日(六) 大阪府北区梅田町(七)

製菓会社役員(八) 大阪三七一
〇六四八(九) 歌集もつ才ある姪
の家庭不和(一〇) 古美術観賞と
読書(一一) 有(一二) 昭和十年
一月「番傘」へ投句

(137) 河相すゝむ

(一) 河相進(二) すゝむ(三)



阿呆阿呆と云うな僕でも風邪をひく 姫路市

隠岐 不酔

バスの席あり今朝はついている 大阪市

西浜 青路

給料も会社も調べ好きになり 愛媛県

川又 庸児

会計を預るメニューに身構える 見島市

守谷秀二朗

石段に疲れた老いは景色ほめ 仙台市

平野 光道

勉強をせよせよ親父はテレビ見て 大阪府

石田 新石

上向かず歩き人生蹴つまずき 松江市

岡崎 祥月

強そうな娘が島から嫁いで来 玉島市

井上 旭峯

たかが株五百に寝つき悪うして 金沢市

山本 木象

停電を待ってた様に兎のシッコ 岡山県

永宗 宗義

知らん顔してる女の耳が立ち 羽曳野市

福井与太郎

おしゃぶりは幼児をだます親心 遠野市

鈴木 二文

ピストルの玩具どころかマイト売る 守口市

樋口 一峯

駅に寝る春遠からじモク拾う 神戸市

大野木真砂

知能犯の一つに越境入学 富田林市

浅川 八郎

子の名前届へ妻も籍に入れ 宮崎県

野口卯之助

幼稚園無邪気な顔で手古ずらせ 松江市

岡崎 雪美

気苦劣で腹の減らない日が続き 倉吉市

奥谷 弘朗

お風呂屋で見せるシミ買いに行き 高知市

須藤 俊江

富士山の姿勢日本の下性骨 玉島市

水粉 千翁

リバイバルの歌で若さを見ぎ置き 河内長野市

森本黒天子

春斗を革新候補かけめぐり 石川島

南 伝一

麦に土寄せる鎌から春が来る 宇都市

神田 豊年

茶ぶくさの音一つにもある年季 京都市

土岐 無極

内職はレジャー楽しむためにする 神戸市

中里 時子

思うようにならぬ浮世に張りがある 金沢市

根上 杏花

ボーナスも云えないとこへ支払し 大阪市

万代句念坊

魂のぬけがら噴火口を見る 豊中市

稲増 久雄

琴故郷へ預けて騒音の京に住み 笠岡市

高木 淡柿

筆不精云い訳丈で半分埋め 羽咋市

三宅 ろ亭

気は病んでいない自信のギブス箬め 玉島市

田辺 好女

ウグイスの声入り銚子で量がふえ 八尾市

片上 光福

姑に一目おいている和裁 岡山県

鳥取 周甫

おひな様お年を召して子は伸びる 大阪市

長田 絹枝

蛍光灯故障のままの回復期 西宮市

沖吉 照児

先生に株をすすめに来た母校 鈴鹿市

吉田 俊和

暖冬でなまこ冷めたく見送られ 竹原市

渡橋 素風

市議選の候補ビラ貼りまで夫婦 茨木市

高木繁太郎



コクヨ
便箋



遠里音(四) 西宮市川東町一〇九
(五) 明治37年7月19日(六) 小
樽市(七) 会社役員(八) 西宮③
〇七六七(九) たかが顔人間だけ
が大事がり(一〇) 蒐集・旅行
(一一) 有(一二) 昭和三十一年
★ ★
「現代柳人録」はご好評をいた
いておりますが、文字は楷書でわ
かりよくお願いしたいものです。
特に地名などは注意していただき
とうござります。
以前の「戸籍調べ」時代からご
住所変更の方もあるとおもいま
す。本社の「現代柳人録」係まで
お知らせください。

碁と将棋

・ 今 西 生 薑 ・



の間の審美観の違いと全く同様である。前者の人が詩を感じて十七字短詩でこれを詠ずると俳句が出来る。她が将棋の方では盤がせましく、おまけにそれぞれの駒に王将は王将、飛車は飛車、歩は歩と云うふうに役割があらかじめ決まっている。

この役割を充分のみ込んでいなければ勝負にならない。この辺が碁に較べて将棋が下司と云われる所以ではなからうか。然し今少し掘下げてこれを見て見ると、碁は事象を平等な二つの眼で見ながらそれを理想化し夢にしようとする心の動きが背景となっているようである。

将棋の方では駒に役割があるので、雑然とした庶民的社会と同様に感じられるので碁に較べて下司に見えるのではなからうかと考えさせられる。

然しこうした点を逆に考えると、涼み碁よりも涼み将棋の方がより庶民的で、岡目八目の周囲の者が肝心の対局者をこのので、対局者の勝負を取り上げたりする愉快なことが起るのではないだろうか。

従って将棋は川柳に全く匹敵するものと考えて良さそうである。即ち上品下品は人間の生活から遠

ざかる程上品になり、近づけば近づく程下品に見えるものらしい。これが俳句に比して川柳が一般に下品とされる所以と思う。ここに

柳 箋

一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）二〇円

人間の愚かさ、見栄等があるようである。

けれども川柳では、将棋の駒同様具象の性質を深く掘下げねばならない。しかも社会対人事を掘りさげれば愚に突き当たる。

ところが俳人よりもずっと深い洞察力を川柳家がもっている処であり、第三者の眼を以て愚を追究し、或は自分を他の自分の眼でもって批判することの出来る優れた力を持っている処である。川柳が人間陶冶の詩と云われるのも亦当然と云わねばならない。

最近私は川柳三月号で表現の見地から川柳を「愚の詩」と定義し、川柳を愚の追究だと云う意味の小文を書き、柳都三月号にも

「リズムと川柳」なる小文を投稿して「愚の詩」の定義と高鷲亜純氏の詩川柳との関係を発表した。が、両雑誌関係からは未だ何等の

反応もない。前述の将棋の話ではないが、せめて岡目八目の意見でも聞きたいと思ったが、これも聞かれないのは淋しい。

然し愚の追究と云う点では意味は違うかも知れないが俳聖一茶が春立つや愚の上に又愚に還る

と云う「愚」の心境句を詠んでいられるのを最近知って、又とい後ろ楯を得たような気がしている。

既に俳句界に於て従来川柳の一手販売だった庶民詩なる言葉がうばわれて終った。俳句人口と川柳人口を比べれば残念ながらこの言葉をうばわれても異議の差しはさむ余地はない。と云って川柳では所謂川柳の三要素以外にこれと云う定義もなく、又三要素だけでは古川柳と現代川柳の区別も出来ない。

若輩の私が敢えて川柳を愚の詩と定義したのも、川柳の文学性を云々するからには学としての定義がなくてはならないからと思ったからである。

私の愚の詩の定義には種々の異論が当然予想されている。然し現在の川柳界では作品に較べていちじるしく詩論が軽視されている。これでは俳句界に川柳界が威圧を

感じるのは当り前である。

明日の川柳を惟い川柳の短詩文学性を説くからには、もっと活発な詩論や定義の意見を先輩諸氏に望んで止まない次第である。

理論よりも作品だと云うもっともらしいが間違った考え方はこの際やめて貰いたい。

理論固れを決して期待していないが少く共理論をバックボーンとした作品を発表して貰いたいものである。

乾杯

気分よく
お酒を楽
しむため
お酒に弱
い方も
強い方も
リポゴールを
お忘れなく
悪酔・二日酔を防ぎ
肝臓障害を防ぎます
●強肝と若さと果實に
リポゴール
疲労・体力増強・ニコチン中毒

武田薬品

集 男の句



男の話題

林野 魅光

女房に死なれた男なんて実にみすばらしい限りです。

この間その女房に他界された僕は男として全くみじめさを痛感させられた。

パンツ一枚の在処がわからず、あの筆筒この引出しと丸で家探しだ。それに何より寂しいのは今日までいつも出入りしていた近所のお女将さん連中の話しに來なくなつた事だ。

寂しいね全く!! 会社から帰って來ても娘一人(小学六年生)(兄は嫁を貰つて別居)では丸で手持無沙汰だ。雑誌を読むとはなしに頁をめくつて見たり、朝の新聞をも一度読み返したり、娘が毎日

同じ様な物を作って呉れる夕食へ一本つけて、それで今日の床につく。

これが男やめめの日常の生活になつてしまふ。男って大体家庭の事に關して何を考へていたのだらうか。女房を失なうとも思ひもしないのだらうかとも思はれる程、何も出来ないまま一日が暮れてしまふのも不思議である。

平常家事の總てを女に任せていた男程みじめであり正に盲目同然である。

元來男つて云う動物はえてして斯様な状態が多く、平常家庭を返り見ない氣もする。が然し家庭内の些細な事迄口ばしを入れるようでは又男としての仕事も成り立たないであらう。

共稼ぎの夫婦にしても、女は家事を見る習性を持ち合せ男は男としての本分がある。いやこれは両性に課せられた宿命的分野と云う

おとこ五月はコイ

の吹き流がしとい

うので七人のサム

ライがペンをとつ

てまかりでまし

べきだらう。そうで無い人も勿論あるにはあるが、

ライスカレー娘が好きなれば毎日の

娘が一人父のくどさへ負けていず

共稼ぎ明朝から妻の番となり

悪友が時々やつて來ては女房を貰えと云うのが居るかと思へば、もう女房なんか貰うなよ、解放感があつていいぞと云うのも居る。

僕は別にどつちとも考へていず全く無頓着だ。男は女房が死ぬると其の引いたした婦人にはもう次のを考へると昔から云われているが、まあそれは若い人の事で、五十を過ぎた僕達の考へる他です。ね。それどころじゃない、棺の中へでも一緒に入つてやりたいくらい

の愛情感が湧いていた。

でも徐々に日が経つに従つてこれでは困るなあと考へ込む事が

ばしばある。別に夜のなにが寂しいと云う訳でもないが、男の本能的意識とでも云うかそれも多少ない事も無いが、兎に角日常の出来事とか身の廻りの事とかで心ゆるした話相手がないと云う事は実に寂しい事に間違ひはない。

可成り婦女子の多い僕の職場でも、時々僕の事が話題となるらしい。可哀想だとか気の毒だとか、お決まりの同情心であらうが、僕に話し掛ける人の少ないのは遠慮して居るからか、要に取られると思ふのか。大体僕は職場では石部金吉で婦女子に対してはあまり喋らない。

特に僕は職場での色沙汰は好まないし、そんな事で話題をまきたくない個性を有しているのであるが、時折若い者が辺りで女の子といちやいちゃやつて居るのを聞くと、いささか氣に障るようになって、心のは、心のせつなさに依るひがみ根性か?。只酒の力に依つて多少女の子をからかう言葉を発する事は酒飲みの習性だらう。

酒は僕の好物であり其の後のわびしい生活の中で稍々量が多くなつて來た事が氣がかりである。

わい談の中で始業のベルが鳴り

靴下の穴を職場の娘が見つ

け
飲む事の他は男にない話題

傷 痕

真鍋 一瓢

地方都市といつても、終戦後の市制ブームにあふられて出來た私の田舎のK市、市域内に幾つかの小山脈を抱いて、だだ広い区域に、旧町村の部落が市の名を冠せられてそこそこ点在している。母の一周忌に帰郷して、三十幾年振りに訪れて市役所の収入役室に久瀨を叙した。その収入役が、幼なかりし頃の私のライバル久馬太である。

「目標前面の敵三百米各個に撃てッ」が久馬太の一つ覚えの軍隊用語である。その度に私と五六人はべたべたと地上に匍わされた。「おいッ姿勢が高いぞ、目の玉が動く、三番は動作が鈍いぞ、コラッ!」散開匍匐前進は久馬太の命によって両側に背の高いのを並べせる。同級生でも一番小さい私は常に三番か四番であり、運動神経の鈍い私はいつも久馬太の叱声を浴びせられた。「コラッ命令が聞えぬカッ」とびしり。私達の武器はそれぞれ自分の肩まで位の竹切れで、私達のは銃であり、久馬太のは指揮刀である。指揮刀は少し短くて細く空振りすれば唸りを立てて撓りようになってい

た。その指揮刀が私の小さな尻の丸みへ挑って落ちた。私は急に立ち上った。久馬太が何か言ったが耳には入らない。棒を振っている久馬太の横身から飛びついて耳朶を右手で掴んでぶら下った。俯仰した他の連中は呆気に取られてるばかり。久馬太は獣の吼えるような声を上げて私に足払いをかけた。

死んでも放すまいと掴んだ耳へ力が入り過ぎていたためか、私は他愛なく体の中心を失ったが、久馬太の方にも誤算があったようだ。私を倒したために掴まれた耳に私の重量が加わる事を忘れていたのだ。久馬太が折重って倒れたために私にも二人分の体重がかかり下にあった木の切株に右目尻をぶつけて甚しく傷ついた私の手は久馬太の耳から放れていない。久馬太の耳から、私の目尻から流れる血で二人は血みどろになった。誰が知らせたか、久馬太の家から大人が数人駆けつけ、二人は町の外科医へ運ばれた。私は傷の痛さよりも、こっぴどく叱るであらう父の顔を見るのが恐かった。

「ええわい、後班受けたんなら叩き出したる所じゃが、向う疵なら、男同士で降りかかる火の粉を払わにゃならんこともあろうかい」と父は一言も叱らなかつた。

男親 男親 男親

この事件以来、久馬太に対する劣等感の痛が取れて敵愾心が燃えはじめた。

久馬太の家は大地主で聳えるような大邸宅の、外郭には四季とりどりの果実が実るのである。私も事件まではその恩恵に浴していたが、久馬太の郎党を除名されてからはもう見向きもしてくれなかつた。私の家に只一つ、夏の初めに杏の実がなった。その頃になると久馬太の郎党の幾人かは私の部下になった。彼等は季節労働者のように、何の実もならない冬季になるとどちらからも、臣籍を離れるかわり、正義に味方して、久馬太と私に互格の闘争をさせるようになって来るのであった。

そのうちに久馬太は町の中学へ入り、私は高等小学校へ進んで、次第に交渉がなくなっていく。菅野久馬太収入役は遠い想い出を懐しむように、温和な顔をはころばせながら、

「覚えてますで真鍋さん。私やよう耳がちぎれなんだと思うて、今でもぞうっとしますわい」と云う。「菅野さん、僕もですわ。もう少しで片目潰すところでしたものなあ」

男だと云われた疵が雪を知り (古川柳)

「あれから毎年寒うなると耳にこたえてなあ」と少し縮れた恰好の耳朶をなでながら。

「僕もなあ菅野さん、年頃になつて女の子の一人も欲しゅうなつた頃、目尻の疵が気になりよつて、これでもなかつたら、もう少しな顔に見えらんかと思つてました。もう今じゃ皺にかくれて前の半分もなくなりましたが」と平和のシンボルの様な田舎田舎した菅野収入役と笑い会つた。四五年前不朽洞金受賞句になつた泣き顔をかくし男の子で展り

がある。私の幼時の想い出にも通うものだ。

死児の齡



小波山人か
ら贈られた
「男の句」

室井八九寸

拝啓此程御地参講の節は一方ならぬ御厚配に預り千万辱く存候本日無事帰宅仕候右乍略御礼申上候也 三、六 小波

(原文のまま)

これは故小波山人、巖谷秀雄氏が大正十三年三月六日東京芝高輪南町五十三の自邸から私へ宛てた古葉書の文面であるが、私に小波先生の温情こもる「男の句」を贈られたのは今から三十九年前の昔になる。その経緯はあとにまわ

し、この古葉書の説明からはいりたい。恐らく若い方々には、そうした郵便葉書もあったのかと若干の興味をひかれようかとおもわれるから。

まず葉書の定価だが、今の一枚五円也に比べタタタの一銭五厘、大きさも現在発行のものより縦横とも一センチ方小型、それに菊の御紋をあらわした表面には縦に四本の点線と、下方三分の二あたり横に二本の界線を入れ、縦線右から第一欄は「市庁府県名(配達局名)」、第二欄は「郡区町村字丁目番地」、第三欄は「宛名」と印刷明示、また横線ヘックつて「上の欄には宛所氏名かくこと」と入念な右横書きの注意印刷がみられる。下方空白はいうまでもなく通信文補充欄である。ついでに郵便はがきには、これよりも更に更に小型のものを発行された時代もあるが、葉書詮索が本文の目的でないから割愛する。

さて本題の「男の句」であるが、私事甚だ恐縮ながら、私夫妻には六人にも及ぶ子に男はなくオール女性、もっとも全然男の子と無縁かといえは必ずしも然らず、出生トップバッターは玉のごとき男児だった。ところが大正の初期疾風枯葉を巻く底に全国を風靡猛威をたくましゅうした流感、いわゆるスペインかぜのために生後僅々二百日にして罹病全家族の

身替り犠牲となり夭折した。光陰流れて彼は五十年になる。この死児を入れると子の合計七人、曾ての「産めよ殖やせよ」の国策に忠実だった証左かつ実績でもある。閑話休題。

今でこそ下手な冗談もどしうるもの、当時私夫妻の悲嘆実にする方なく、あたかも頭をどやしつけられ掌中の珠玉をもぎとられたときショックで、周囲の誰れ彼れが、「まだお若いのですからすぐあとができますよ」と慰めてくれるご親切にも、「どうして同一の息子が出現するものか」と心中失礼にも反感さえ覚えたことを記憶する。かくして後続出生みな女子という次第。因みに現在には末娘を除き、おかげで順次世につき、すでに三太郎先生のいわゆる子らの子らが十一名、うち五名まで元氣な男の子らの子である。オッとまた脱線しかけて失礼。かくてあるとき小波山人先生が講演行脚の杖を私の郷里南紀田辺に曳かれ、談偶々私に男の子なきに同情され、「君のために祈ろう」と私の画帳へ、さつと朱翰の日本刀を描き、それへ賛して

桜さく日本に生れ男かな

の一句を贈られたのである。然るに十分に空しくその後の出生依然として女子につぐ女子、まさに私は人生終着駅頭彷徨中という次第。

編集局二三夫氏から、お前の男の句があれば二三繰り込んで……との意味の仰せでもあるが、むろん柳句だらうけれど、若い頃少しかじった俳句にも、老来手習いの中、の柳句にも残念ながら進んでお目にかけられそうなのもなし。しかし時恰も春のお彼岸、おもわざりしわが亡き愛児の追憶にふける機会を与えて下さった厚意への感謝をこめて粗末ながら、

死児を臉におけそくへさくら餅

いやはや飛んだ文字どおりの「死児の齡」の不文。平に寛恕を乞う。
(三七、三、二二三)

ある男の半生



みのり薄き世代について

早川 清生

男ってあわれなものである。男の最大公約数K君を紹介し上げる。

私自身平凡なサラリーマンで、みなさんにご披露できるような、とっておきの話などあるう筈もないが、K君とて同じである。

居候よく満鮮の地野を説き

文象

昔はよかった。居候さえも気宇壮大な夢をもつことができた。し

かしその時代は過ぎ去った。K君は自分を戦中派だと考えている。

戦前派にはばら色の青年期があった。彼らはその中で人生を懷疑し人は何のために生きるかを論じあった。アブレの青春はピンクに輝く。彼らには思索より先に行動があり、しかしそれなりの哲学がある。ところがK君がいろいろなものを学べき年令に達したとき彼は教科書の代りに勤勞動員の旋盤を与えられ、学徒出陣のゲートルが心身へがんにがらみに巻きついた。彼の思春期のテーマ音楽は小川のせせらぎでもなく、深夜喫茶のジャズでもなく、往復ビンタが頬に炸裂する音とB二九の爆音とであった。

私は隣組でただ一つ生き残ったいびつな三球のラジオから、天皇が難解なことばで敗戦を告げるのを聞いたが、K君はまもなく粗悪な、しかし当時の私たちにはカシミヤやツイードなどよりはるかに豪華に見えた軍衣を何枚かあてがわれて現れ、彼のほんとうの人生を開始した。上官が軍需品を自宅に運ぶのを手伝って得たこれらの軍衣は、長男として弟妹のため闇市で食糧を買う代償となった。B二九は父が丁稚から創り上げた家業と、父の立ち直る根性をと焼き払っていたのである。彼は学校へ還らなかった。

雑炊と焼跡の中で暮らした割に頑強な彼の身体は、しばらくかつ

ぎ屋として彼の生計を支えた、が彼はやがてある役所に就職した。

役所の給料は安かったが、赤い旗を振るたびに少しずつ上った。彼はちよつと頭がよく、ちよつと名着心があったので、職員組合の執行委員や青年部長の席を推された恰好で獲得し、上級幹部たちの役にも立ったが、レッドパージにかかるほど正直でもなかったし、組合の力が弱まるとともに組合から足を洗った。彼は生活の便宜のため同じ職場の女の子を妻にした。愛情というヴェールが幸福に飢えていた同じ世代の彼女を旨にした。彼女は仕事の中でお茶をくむのがもつとも得意であったが、勤続年数が長いので彼より給料が多かった。

愛の巢を女男にさがさせる

竹莊

新郎は扇の位置を教えられ

一啓

日曜の度にととのう新世帯

蹄二

女房の前の吊り革へぶらさがり

紺碧樓

家からの煙草いつもの辻で消え

啞亭

人知れぬ勇気で妻のヒスに耐え

生々庵

産院へ夫うろうろしに出かけ

静馬

女が男を通俗化することを川柳家はよく知っている。その上に性

は父という枷をはめこんだ。彼の楽しみはいつか安い酒とパチンコに限られていたが、これも十分には与えられなくなった。彼は戦中派だからアパンの話もアブレの行動も理解できると称しているが、

実際はどちらの側からも仲間だとみられていない。若い娘が簡単に身を許し、彼の方が深刻に悩んだが、娘はもちろん彼のものだと思っておらず、彼に嫉妬だけを残した。戦争という過ちで彼の青春と学歴と財産とを奪った国家に、彼は毎月天引きで高い税金を払っているが、国家はアメリカに比べてまだ担税率が低いと言っている。彼は給料以上の仕事をしているが、学歴がないので係長にもなれないし、世間はマスコミの暗示どおり役人はすべて怠惰で無責任で金さえ見れば手を出すと考えている。

棟梁は次男を技師にする気

で居 東魚

と果たせなかった夢を子に托そう

とすれば

育てるのは義務やないかと

子に言われ 好祐

である。いずれは

次々と世帯持つ子の他人じ

み 独仙

を覚悟しているが、どうみても割に合わないバランスシートではないか。男なるかなしみK君の例をあげて貴をふさぐこと依如件。

男の子

樋口 舟遊

鯉のぼり腕白小僧に育てたし

男はエゴで気儘で見栄坊である。よく云うが生れつきでない。屋根の上の矢車がからから薫風へ鳴り、鯉のぼりが長男の誕生を祝うように大きく泳ぐ下で、腕白でよし健康に育てたい親心が、次第に大きくなるにしたがい腕白を喜ぶ。これが女の場合「女のくせに静かにしなさい」と叱る。こうして大人になっても「少々は酒を飲む男」とか「若い内に極道の一つもした男」とか云う。

御承知の通り酒は狂人本と云い、飲めば自然に量もふえ果てはアル中になる人もあり、結局妻子を泣かせる。これら総てが男を増長させエゴにさせる。

五人目に長男停年ものたりず

「女の方がよろしいよ」「男は嫁を取るともうおしまいです」などと近所の同情、五人目に産れた長男だが、停年近くによくやく一年生の跡取り、長女に養子でも、などという話をよく聞きます。そうかといって男の子が三人では、たえず兄弟喧嘩母親のノイローゼからこんどこそはと女の子欲しさに

産むそだが、産れてこないことにはわからない。まったく世の中は儘にならんものです。

二十数年前私はあるゴルフ場で勤務していた。仕事はキャディの世話と練習をしてプロになることだった。労働賃金の安い家の男の子達が集りアルバイトだ。日曜日は客のバックを担ぎ四里は歩くであらう重労働である。冬の日には寒さにも負けずに池に落ちた玉を、むらさき色になった足で拾っては、事務所に売りに来る。本当によく働いた。中には悪い奴もいて困らせたが「首にするぞ」の一声に、彼等も生活の一端をになうだけにすぐに直った。

外人客も可成りいた。クレン氏はチップを出さないで有名だった。「なにもクレン」なんて洒落ていた。ステスカール氏は銀貨二枚約束をしたように出すので彼等に人気がある。マイケルソン氏は家族連れ、夫婦は腕を組み金髪で淡い空色の瞳、二人の男の子があつて可愛いかった。愛妻家で彼等にも親切にした。ワンマンの私の父とは雲泥の差だった。こうした彼等との交わりへ常に緑の芝生と新鮮な空気があり、青春の希望に燃えた最良の時もあった。しかし泥沼のような戦争が私の行く方向を変えた。

男の子裁縫道具を買う平和二月のある日柳友で、Kという

小間物店で連針布と裁縫道具を買って男の子を見かけた。Kさん曰く男女同権で、女を理解しボタン付けくらい出来る男に育てるべきだということだった。

女で生まれて

いたら

野村 味平

男と言う代物は、ひとたび、家から一歩、足を踏み出すと、何をしているやら知れたものでは無い。商売柄、わたくしは、得意先に出かけると、亭主は、昨晩から戻りません。どこに何うしているか知らんと、たよりながられて、亭主には、極秘にして置いて下さいよと、念を入れて、幾らかのへそくりをお預りすることがある。

蓄まったら娘の嫁入りに、父さんには内緒で、あれも、これも、持たせてやりたい。それから、自分も、ウールの御召の一反位は、買いたいし、残れば、団体旅行費の足しにもしたい。楽しみごとは、父さんばかりではないのだから。

マージャン荘に行つて見ると、この亭主族たるものは、昨晩からの連チャンで、うどんの仕出しのタジを横に、臉を真赤に腫れ上がらして、自宅へ廻つても、ここにいたとは、言つては呉れるなややと言う。いやな気持である。

小料理屋兼宿屋に行つて見るといつまでも、恋のやりとりの果てない、亭主族もいて、顔が合うと壳を叩いて、ヤァと言つて照れ臭さそうである。吹き出したいようにもなる。

あきらめりや男らしいと言
いよられ

三十年以前に、わたくしは、精神的にも思想的にも、行き詰りが来て、ぶらりっと、浪人をしていた。その頃、熊本県人であったM氏が、支那浪人の振れ込みで、この町に来て住んで、二ページの週刊紙を発行して、故郷鳥敏師に師事して居られたのと、偶然に知り合ったのが動機で、どうにも可哀想だと言つたので、毎月、五円也のお小使銭を貰うことになった。その当時としては、有難がったものである。けれども、一字、半句も、週刊紙には書かせては、貰えなかった。自分が、全紙を執筆するからとのことであつたが、恐らく記事を書いたところで真赤にペンを入れられたことではないかと思うのである。毎日「君、男らしく、しつかりせよ」と、繰り返えし繰りかえし励まされて、やさしくして貰つたものであつたが、一昨年の一月頃か、熊本市のご住居へ川柳雑誌を一冊お送りしたところ、僕は川柳は作らないけれどもと、書いて

川柳を女房としての二十年

早速、こんなお返事があつて、久しぶりに目頭の熱くなる思いがして、どうにもならなかったものである。

男の世界

不二田 一三夫

「任侠」が死語になつてゐる味気なき（四一八号川柳塔）
いやな世の中になつてしまつた。世間さきからは暴力団だとかヤクザとかいわれているが、あの世界にはヤッパリ男がいまいたね。他人に頼まれ、ある親分から金を借りてやつたら、そいつが姿をかくしたため、その返済期日になつて、ボクにも金が出来なかつたから、仕様がねえ指をつめて謝る決心をした。

このことを知つた新谷米吉というスゴク氣づぶのいい男が、
「これでなんとかカタをつけろ」と、妻子からご両親の衣服まで、三輪車に積むほど貸してくれた。ボクは泣いたね。顔をクシヤクシヤにして泣いてしまつた。
「そんな泣き顔じゃ質屋へも行かれない」

と、米さんが云えば、米さんの弟分の芳と黒の二君が、
「オレの分も持つて行つてくれ」と二人とも目の前で着物を脱い

で、シャツ一になつて大きなフロ敷包みを質屋へ持つて行つてくれた。

世話をしやつても、それが恩となつて返つてくるか、こないか、そんなことはどうでもいい。とにかく沈んでるヤツを浮かせてやるといふところに、俠客道があつたんですよ。

米さんがその後、女とバクチで裸になつたとき、結婚費用に借りた金を全部バタいて、あの日の恩返しのマネごとをしたら、女のほうからは、今さら結婚を延ばされては世間ていがわるいといつて泣きつかれてね、と云つて金がいふ返つてくるか、こいつは握つてみないとわからないので、周囲の連中はデンヤワンヤでしつた。



私の見たハワイ

(二)



ハワイ娘のフラダンス

産業について

今度の旅行は一応、産業視察という名目で貴重なドルの割当を貰った關係上、日本政府(一寸大げさだが)に対してもハワイの産業について書かねばなるまい。

ここでは砂糖、バナナ、観光を三大産業と称し、それぞれ年間、一億二、三千万以上の製産と収入を挙げている。

然も前記二つの製産についてはあくまで風土と天候に制約され、近代のオートメーション化によることが出来ない産業であるだけに、今日の成長をみるまでには一方ならぬ苦難の跡がうかがわれる。

特に州独立後は労働賃金の高騰(最低賃金は一時間、一・二五弗)によるコストアップを、より科学的な栽培法と、あらゆる機械化によってこれを補い、南方諸国との競争に打勝っている努力は、さすがアメリカよと感心させられ

た。その一例を挙げれば、年二回しか収穫のなかったバナナを

完成して、この薬品を飛行機で何十万坪の畑に散布し、遂に年三回の収穫に成功している。その他、害虫駆除の方法等に於ても到底我々の農業知識では想像だに出来なかつた方法が採られていた。次に観光事業に対する意気込みも亦素晴らしい。

現在、世界各国から年間約三十万人の観光客が、一人当たり四百弗から五百弗の金を落してゆくらしいが、これを一九七〇年迄には年間六十万人の受入れ計画で、凡ゆる施設の充実に力コブを入れていく現状である。

然もこの熱意が、官、民共に徹底していることには反省させられた。特に日本で役人といえは横柄で、不親切の標本の様に思っている我々に對し、官公立の観光施設に勤めている人々が、所謂、公僕として実に、心憎いばかりの親切

御眞影という

言葉が生きていた

若本多久志

を以て遇してくれたことは、忘れ得ぬ思い出の一つである。

又ホノルルは観光都市として、街の美化運動が徹底し、走行中の自動車の窓から煙草の吸いがらを投げても罰金を科せられるそうである。そう聞けば街を歩いている人に、日本の様なくわえ煙草は見掛けなかつた。

滞在中のある夜遅く、キャバレーで飲んだの帰りの、街のまん中に大きなトラックが何かモンモンやっているの、何事かと近づいて見ると街路清掃車の作業中だったので、我々は済まない様な気持ちでそっとその横を通り抜けたが、これでこそ、昼間の街路に芥一つない理由がわかつた次第、実に羨しい限りである。

ドルの無い国からドルを落しに来

ホルモン剤ここは畑へ撒いており

日給が十ドルなのにストもやり

親切に国境はなし身に沁みる

自動車の話

アメリカでは七人の労働者の内一人、六軒の商社の内一軒は、直接、間接に自動車産業に関係があると聞かされていたので、ハワイは本国程ではなくても、自分の商売柄、何かを掴んで帰りたいと特に念入りに見聞して廻ったが、矢張り驚きの連続であった。

先ず一行とホノルル市内を見物中、山の手へ差ししかつた広場に、およそ二千台余りの自動車が並べられていたので、ガイドに「何という自動車会社か」と訊ねた処

「もう此処はハワイ大学の構内です」とトンチンカンの返事、「いや、この自動車は中古車市場なのか」と再問すると、

「ああ、これですか」と説明してくれたことによれば――

州立ハワイ大学には学生が六千人余りおり、従つて少なくとも五千台のパーキングが必要なので、三カ所に分けて作られた駐車場の一つであるとのこと。

なる程、新しいのは六十二年式から、五十年式位のボロ――学生なら当然だろう――まで各種類の自動車が整然と並べられている。

「ヘー五千台の置場!」と一行の誰かが大声をあげたので皆が大笑をした一幕だった。

この外、市内に廿五階建のアラモアナビル前の広場とその地階にも五千台の駐車場があった。然もこれは無料で、その前のシアスト

いうデパートや各種専門店への買物客が自由に、指定線に従つて、千台余り駐車させていた。市内の公道に設けられた、パブリックパーキングでも一時間、十セントという安い値段で、日本のそれに比べると約半分の料金であることは、我國自動車行政の貧困を痛切に考えさせられた。

交通信号のある横断歩道は勿論だが、信号のない指定横断歩道に一人でも人間が歩いてみると、両方から進んで来た自動車が一審にバタバタとストップし、これを見送つてからスタートする。

人権尊重というか、高度の遵法精神が知らないが、胸のスクような感激を覚えた。日本も何時の日にかこんなことになるのだろう。

又ある交差点で日系のボリさんが、大きな米国人らしい歩行者を大声で叱っており、その米人が頭を下げて、ボンボン言い訳をしている、日本人にとっては実ににはえましい風景を見たが「ああ、ハワイだなあ」と感を深くした。

欧米を廻つて来た日本人の誰もが「日本程、自由のあり過ぎる国はない」と言っているが、成程と私もそう思ったことは、ハワイ(多分アメリカ本国も同じだろう)では交通違反の一件をポイント制にして、――駐車違反は何ポイント、スピード違反は何ポイントという式で――合計二十ポイントになると運転免許が一定期間停止されるそうである。

事故運転手の免許取消は憲法違反とか、人権無視だとか勝手な解釈をして、これに反対し乍ら、自由と平和運動をやっている一部の日本人が絶えない限り、我國の死亡事故ゼロの日という悲願は、到底達成出来ないであろう。

然し又嬉しい話もある。それはホノルルの国産車（日本の）販売店で聞いた話だ。——ボンハムヤング商会という米国系の販売会社で（ジープとダットサン、ブルバードを並売している）毎月平均四十台から五十台の売上げがあり、お客は皆米国人ばかりで、ダットサンの人気はすばらしいとの事。そしてこの会社はハワイ各島にランチがあるのて来年度（七月以降）には月に百台売上げの目標で、相当確信のある様子だった。

人口三十五万に十六万台の自動車を持っているホノルル、然も世界の自動車王国の一州に、我國産車のダットサンが、大きな額をして走り廻っている風景は何と頼もしい極みであろう。

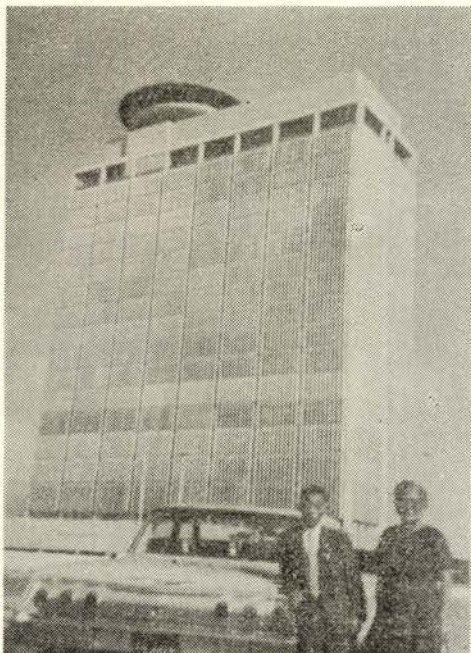
おばあちゃんまで憐れめてハイウエー
ダットサンが走ってるよと立ち止まり

ハワイの日本

「明治は遠くなりけり」と常に慨嘆し乍らも、ジャズを理解し、ツイストの一つも踊ってみようかという、複雑な老人の眼に映ったハワイの日本調は、いろいろ考えさせられることが多かった。

先ず日本領事館の建物に、大きな金色の菊の紋章——敢えて御紋章といいたい——がつけられ、日の丸の国旗が掲げられていたことの喜びは、明治生れでなければ味えない感激であった。

そしてここには未だ、御真影という言葉さえも生きていた。又ある朝、ホテルから乗ったタクシのハンドルに、成田山のお守りがぶら下っていたのは、ホロ苦い思いをさせられたし、西本願寺別院や、曹洞、真言、日蓮宗各別院の建物はモダンだが、所謂日本仏教の伝統的なくさみが残っていることにも何か割り切れないも



五千台のパーキングセンターを持つアラモアナビル

のを感じた。この外、大神宮、金比羅神社、伏見稻荷神社等、全島に百余りの寺院と神社があるばかりでなく、天理教、金光教、生長の家、さては創価学会、踊る宗教に到るま

で、日本にあるものは一通りあるという宗教の自由ぶりであった。懐しかったのは日本人食堂の朝食だった。味噌汁、奴豆腐、沢庵に梅干、鮭の刺身に白い飯と、何んだか錯覚を起しそうな気持で箸さばきも儘ならぬ有様、一行の中には味噌汁のお代りを三杯もして大笑い。お勘定をドルで払うこと以外は何か、日本の軽食堂と変らない。その勘定も、日系人はドルを円で称え、例えば、二ドル五十セントのことを二円五十銭と言う訳でこれなども錯覚を起し易い。サヨナラパーティをやった「飲

楽」という一流の料亭でも、座敷の調度は皆、純日本風で、畳の上にあぐらをかくて、ビールは朝日、酒は沢の鶴、お酌は年増の日本美人というあんばいで、何んだかミナミで飲んでるような気分だった。

た。この料亭に、お菊さんという大阪の女がいて、我々を懐しがりと話はずんだあげく、お惚気入りの身の上話まで聞かされたが、この女中さんの月収が十六、七万円、ハウスから六一式シボレーを運転しての御出勤と承って、一座の重役さん達も、呆気にとられていた。最後にホノルルで見た面白い新聞広告をご披露しよう。

★
（ハワイ週刊タイムスから）大阪柳壇の雄、若本多志氏が川柳雑誌主幹麻生路郎先生よりウィロ社同人にあてた左の伝言あり、若本氏より代読された。
ハワイの皆さん、私はいま晩年の仕事に打ち向っています。皆さんに申し上げたいことは、いのちある句を創れ」の語に尽きます。その人、その人のよき人生を句の上に見せて欲しいのです。終りに皆さんの御健康をお祈りする。

一九六二年一月
川柳雑誌社主幹 麻生路郎

★
ウィロー社主幹で若本多志氏歓迎句会がもたれ、氏の選で添作や適評があった。

兼題「肩書」 (三才だけ発表)

稲荷にも肩書があり正一位

快夢起

肩書の重みに耐える気の疲

内海

肩書が笑えぬ顔にしてしま

斧平

兼題「外遊」 (三才だけ発表)

外遊はただ雲ばかり見て帰

万里歩

あちらでの話は英語もちよ

と混ぜ

外遊をさせて女と手を切らせ

沈丁花

外遊をさせて女と手を切らせ

カロ女



入門講座

研究題「袋」

清水白柳

今回の袋という題は広い範囲を

持って居りますので面白い句を期待して居りましたところ、期待の通りいろいろの句が集まりました。中には句に仕立てる事が出来ないので困られた方もあるようですから本文を味わって頂きたいと思ひます。句にまとめるのはどんなところに焦点をしなければよいかということにもふれてみたいと考えて居ります。

入院へふとん袋が先に着き

入院へふとん袋が先に着き

入院の句は先に着きという先という語にあわだしきを表わしていますし、退院の方は先にという語にいそいそとした喜びを感じさせていて、どの句も一応出来ているのですが、だれしもが感じること柄は句として平凡なということになるのであります。

K

袋路の管が彼女を見失い

爪弾きが袋小路の一隅から

古句に「通り抜け無用で通り抜けが知れ」というのがあります

袋路の札の句はこの古句を説明したに過ぎないと言えるようです。彼女を見失いの句は小手先きだけの句で袋路と見失いにそぐわないものを感じます。爪弾きの聞えてくる句は単なるスケッチにしても物足りない句になっています。それは作者が感じたことを報告したに過ぎないからです。

胃袋のへり工合で昼やなど

胃袋にこてられ斗病多難なり

胃袋がちよっと慌てたフグ料理

腹のへり工合を胃袋のへり工合といったところに袋という題にこたわった感じがします。そしてこ

の着想も万人共に感じる事ですからよほど表現がよくなければ成功致しません。斗病の句はこてられたという現わしかたにやや句としてのポイントがあるようです。フグ料理の句は作者のあわてたのを胃袋といったところに面白さはありますが、ちよっとが少し軽く安易にまとめられたような気がしました。小松園氏の句に「胃袋に落着かぬ先請求書」というのがあります。この頃では胃袋に入らぬ先に買われる食券ですが。

箸袋貼りも貼った旅記念

割箸の袋もためて旅行好き

句にまとめられた意図はよく判るのですが箸袋でなければならぬというところが句の上に感じられないのです。宿のレベルであっても、レットルであったとしてもいような気がするのはこの両句に共通の弱点ではないでしょうか。

有田生れ裸になつて味を見せ

殊更にみかんのうまい風呂上り

どの句も袋という字を使わないでみかんの袋を詠んでいるのですが、有田生れの句は、どうだ面白

いだろうと押しつけられたような感じを受けるのです。それは面白く作ろうとする作者の感じが浮き上つてしまつて技巧という程のものを持つていない句に仕上がってしまつたからだと思います。殊更に

の句の方には素直さがあります。みかんのうまさだけを言つて袋を感じさせようとする処に無理が生じた句だと言えるようです。

お袋も家に帰ればお母ちゃん袋だけ残つたようなお婆ちゃん 野迷路 母親をお袋とよんだ句は古句に沢山ありすぎて現在ではすでに死語になりかかつて居るのではないのでしょうか。袋の題でお袋の句を詠むのは、雀という題で麻雀を詠むようなもので私としては感心しないことだと思つて居ります。お婆あちゃんの句は比喩として袋を詠んで居られるので面白いと思ひます。私が先月の句会で詠んだのに「風船がしほんで祖母の顔に似る」というのがあります。観点はよく似ていますが袋だけ残つたという作者の着眼点がよいと思ひました。

一応は重要書類と袋綴じ

袋綴じまだ気がすまず判を押し

袋綴じにするのは重要な書類であることは通念でありますから、それを説明してはいはいませ

ん。その点判を押しの句は、まだ気がすまずと人間の弱点を批判して成功しているわけでありま

す。1カンガル親の袋へさつと逃げ

2袋から顔のぞかせてカンガル

3カンガル一隅の袋でおんぶ

4カンガルーの雄の袋を子に

問われ

1と2の句は見たままを十七字にまとめたにすぎないので、そ

うすなあ、と言つて合槌を打つた

けの句でしかないのです。腹の袋におんぶされの句は作者が腹の袋なのにあれでもおんぶだろうかと主張を持って居られますが句としては腹におんぶが狂ひみで感じられるので私としては採れない句になつて居ります。雄の袋の句は、お父さんがカンガルーの袋に何を

入れるのと子供に聞かれて困つて

いる姿が詠まれています。少し

オーバーなものを感させざるよう

です。それは作られた句であるか

らだろうと思はれるのでありま

す。

1 手袋を出したばかりに金落

し 炊事手袋までははかない妻

の留守 3 気に入り手袋片方だけ落し

4 派手に刺す手袋シワ手若返

り 5 手袋の片方菓子やの軒につ

り 1の句の出したばかりにという

着想がよかつたと思ひます。句も

素直に詠まれているので好感が持

てます。2の句のはかないに初め

は迷いました。果敢ないというこ

とに考えますとまではが変に感じ

ましたので穿かれないだろうと考

えたのです。そして炊事手袋では

使われない留守番の主人を詠んだ

句だとわかつたのですが、普通手袋

をはくとは言つても句にする場合

漢字を入れるか、或は「炊事手袋

までは使われぬ留守」とでもし

なければ誤解を生じるかと思いましたが、3の句は作者の主張が顔を出してはいますが、父に入り手袋では舌足らずの句に気がしてしまいました。そして手袋の片方だけ落したというのにはありふれた事柄です。これだけのことをもとにして句にまとめる苦心をしなければならぬと思います。4の句はシワ手若返りにはあまりにもそのまま過ぎます。この句もそのシワだらけの手を頭の中に描いてそれから川柳を生み出す練習をしてはいいのですが、5の句はスケッチとして成功しています。この片方の手袋は赤か黄かの模様が入った毛糸の可愛らしい子供用のものに違いないと思います。それは菓子やの軒にという語から想起させられるのです。一語一語を大切に使わないと佳句は生み出すことが出来ないのです。

1 袋貼り馴れた手つきの裏長屋 K
2 シモヤケの手をこすり母袋貼る R
3 袋貼る母を笑って娘のマニキュア K
4 袋貼るそばにおやつをほしがる子 ひろし
5 袋折る手を休めず豆腐呼ぶ 照見
6 袋貼り入社通知を待つ母娘 真砂

1の句には一句としてのポイントがないのです。作者が落語的風景を詠み流したにすぎないと言われても仕方がないと思います。殊に裏長屋という語に嫌悪感を覚

るのです。2の句は霜焼けの手をこすり中七に冗漫な句語を持ってきたので切実感のない句になってしまいました。3の句はマニキュアをしている娘の態度をよく詠まれているのを感じることが出来ません。どこかに弱点があるように思うのですがハッキリと申し上げられないのは私の勉強の足りないところだと思えます。4の句は平淡な句で深味に乏しいのです。前の句の娘のマニキュア程の批判性もないのです。素直に心をひかれたのです。5の句は佳いと思えました。手を休めずという真剣な仕事のしぐらを詠んで、そして豆腐呼ぶその声までが聞えてきそうです。生活の一コマをよく詠んで居られます。例えばそれが想像で作られた句であっても何等差支えないと思うのです。6の句も佳句です。1と2の句を背景にして通知を待つ居る母娘を描き出したのは立派だと思えます。省略の見本を示された句であります。

ボチ袋孫の数だけ入れて待ち
早う見たい中が気になるボチ袋
ボチ袋身内少く子等の愚痴 S

孫の数だけの句に年令的なものを感じられますがそれだけに終っています。中を見た句は早よう見たいといくらか作者の意志が現わされていますが平凡になっていきます。子等の愚痴の句はよく判りますが理屈っぽい点、つまり、身内が少ないうえ、もうボチ袋も

少ないと理屈を言っているような句になっていくのが弱点ではないかと思えます。身内が少なくても中味が多ければよいので愚痴を言う子供を詠まずにもっと突込んだ句を考えると面白かった。

1 天引きをされて袋の軽いこと N
2 万札が出来て軽過ぎ味気なし S
3 給料から出してる勘定盗み見る 美由起
4 月給日若さが袋を捨てさせる 良圭
5 逢引の減減給料袋から出し 初甫

一万円札が出てから給料袋が軽くなったという句はすでに詠み古されています。それに天引までされては余計軽くなるのですが、それだけに終っているのが1の句です。2の句一万円札を万札と省略されて居りますが少し無理ではないかと思われました。それに加えて味気なしと説明してしまっても、何にそれこそ味気なものにもならないです。3の句も勘定を出している場所を想像させるように句を推敲してはしなかったと思いましたが、急いで作られたのではないかと感じられました。4の句可成りまとまっています。若さという文字がこの句のポイントになっています。袋をのをは私等の場合省略してしまいましたが、この減減もよいと思います。逢引の句の減減の減は幻を使うのですが当用漢字に無いのでしょうか。財布から出さないで給料袋から出している男性に幻滅を感じたのは面白く思

いました。恐らくその男性もあわてたことだろうと苦笑を誘われた句であります。袋から跳ね出た金魚の瞳の光り N
ナイロンの袋で金魚淋し R
ポリエチレンの袋に金魚街を見る 和三郎
ビニールの袋で金魚恋もする 保夫
ビニールの袋をためて世帯染み H
ポリエチレン章魚かんをけとは匂付いてず 頼光
ナイロン、ビニール、ポリエチレンと名称は色々ですが句にはどれと云って面白いのがないようです。金魚の瞳の光りは生への執着の光りなのか、苦悶の光りなのか私にはハッキリ判らないのです。跳ね出た金魚の心理描写なら瞳の光りと安易に逃げてはいけなさと考えられます。金魚淋しけれの句は人間として金魚の心境を詠んだのですが淋しけれでは平淡すぎます。金魚街を見るの句は作者がぶら下げて帰るのか、子供が持つて帰るのかどちらでもよいが街を見るでその状態を描き出しています。金魚恋もするの句は器用にまとめられた机上の句であります。といつては作者に叱られるでしょうが、袋ではあります。阿茶さんの句に「猫の目と出会ひ金魚が向きを替へ」というのがあります。作者の真面目な作句態度が句を通して読む者に迫ってきます。参考にしたと思います。世帯染み

の句は女性らしい心づかいを詠んで居りますが通り一べんの句にはかなって居りません。章魚の句は着想の広さを感じさせられますが面白さだけをねらった底の浅い句と言えそうです。

母さんへそつと返した空袋 S
食べてしまったのでそつと返したの何故返さねばならなかったが判らなかつた句です。
袋まで宣伝文句書いてある 京四朗
着想はよいのですがその宣伝文句を書いた袋からもつと想を発展させて行く練習をつづけてほしいと思います。

捨てられる運命を持つ紙袋 野迷路
喰われるか捨てられるか実と袋 同
前の句は余りにも平直、言切ってしまったので句に余韻がなくなりました。やはり深さを求めなければいけないと思えます。後の句は格言めいています。それは喰われるのが実であって捨てられるのが袋であると割り切ったことに十七字も使っています。これから川柳が始まるのですからこれを頭の中に置いて具体的なものを詠むことに心掛けてほしいのです。

あれもこれも袋につめたい 親心 周甫
嫁入りに持たせてやるものなのか。旅行にでも出掛けるリュックか何かへつめる食べ物なのかもと推敲してはいい句であります。

旅の窓桃の袋が気にかかり

紙袋の桃を数えて含監ひま
保夫

ひまつぶし桃にかぶせる袋
千甫

気がかかったのは欲しかったのかどうかと考えてみました。何物足りない下五文字でした。次の句は寄宿舍の庭に生えている桃に氣を使っている含監を描いて面白く思いました。ひまつぶしの句は自宅の庭にある桃にかぶせるのにしても、煙の桃にかぶせるにしても、ひまつぶしは少し愛に感じました。事実作者がひまつぶしに袋を張ったとしても共感をよぶことが出来ないようです。誇張であっても良いものと別の句語を考えるのがよいでしょう。私の旧作に「袋だけ三つ四つ残る桃畑」があります。桃の実のある頃の畑に淡い郷愁のようなものを感じた句意であります。

宿替に奉公袋ほつとかれ

酔夢

戦時中の若い思い出のある奉公袋につめられていたものは何であらうか、それをほつとくのは苦しい思い出を捨てるためなのか、句が淡淡としてゐるために損をしている句です。

水引の袋がへぎへ畏まり

和三郎

結婚のことを詠まれたのですが畏まったのは水引のかかった袋だけではなくてその場の雰囲気を感じさせるのには表現が不足だと思います。

ノリ袋物干竿でしゃちよこ
ばり
弘村

珍らしい着眼点で面白く思いました。併し単なるスケッチ川柳です。こうした行き方もよいと思えますがもっと洗練されて来ますと単なるスケッチでも深味のある

清 酒



灘・魚崎

大塚合名会社 釀

句になってきます。袋には関係のない句ですが柳樽初篇に「張り物の嫁はむすばぬほをかむり」というのがあります。こうした句が出来るようになるまでお互に勉強したいと思ひます。

小麦粉の袋日覆の挿木箱

勝子

女性のこまかい心遣いを句にして居られます。生活を詠むことも大切ですが段々と川柳本来のあり方に句境をひろげて行く習慣をして行きたいと思ひます。

焼芋の袋かくせど湯気が立
ち
宇佐夫

可笑味をねらったつもりで句でありますが成功していません。それは句にする素材そのものが浅いからです。初心の方に深さを求め

るのは無理だとは思いますが縦横むじんに暴れまわる位の気持ちでどしどし作句することです。

1 菓子袋見てから手伝する子
供 河太郎

2 菓子袋あとはばちんと児へ
音 隆史

3 耳もとで叩いて見せる菓子
袋 桂風

4 袋菓子与えてなだむ男親
句念坊

5 木ッ子のおやつ袋のままで
や 杏花

6 氣に入らぬ菓子袋のままで
千甫

どの句も平凡さを脱け出ていませんが1の句は見てから手伝する処に子供らしさを感じました。2の句はばちんと音を立てた処が取柄です。3の句は空になったので袋を叩いているのが耳元であったのが面白いと思ひました。4の句は男親が袋ごと与えている処によさを感じました。5の句は袋菓子でなくて目方で買ったのを袋ごとおやつにやらねばならなかった末ッ子の駄々っ子がうかがえます。5の句はその駄々っ子がぶりを句にしているのです。併しこうした句境を少しでも抜け出る熱意を持って進んでゆきたいと考えています。

七年程前の句に「孫の持つ手提袋は菓子ばかり」という操さんの句があります。嬉々として祖母と出かけてゆく姿が描かれています。参考にしたいと思ひます。

流行はナイロン袋に財布入
れ 一男

中に見える袋に財布を入れている不用心さをついていますが流行はと上五文字に置いた説明が句を弱くしています。

父の家信文袋ある記憶
Y

春うらら信文袋で舟をこぎ
K

信文袋という大時代的なものを句にしてもよほど句が洗練されていなくて共感を得るような句にはならないものです。

割切った顔でお布施を仕舞
い込み 清風

職業としての僧侶をよんでいますが、清子さんの句に「南無阿彌陀お布施袋に数珠がふれ」というのがあります。描写のよさを味わってほしいと思ひます。

頭陀袋情けの喜捨に満たさ
れる I

頭陀袋とうとう掛けた三代
目 S

昔なら六文銭の頭陀袋
Y

最初の句は情けの喜捨と理屈通りにして失敗しているようです。次の句のとうとう掛けたということは事業に失敗したことを表現したかったのだし、それが、そこまでは考えられませんか。三代目で失敗するという句は古川柳に「売家と唐様で書く三代目」というのがあります。昔ながらの句は六文銭のしつたのついた普化僧を詠んだのか知れませんが、この句にもズレがあるようです。

昔の人は勘忍袋と言うを持

今の言葉で忍耐というのでしうが勘忍袋の結が切れた浪花節的な感覚を捨てたいものです。
釣竿の袋を払うまでに癒え
八九寸

やや低調な句ですが結語の癒えに救われたといってもよいでしょう。

情容赦なく来る給食費の袋
光道

余り佳い句ではありませんが類句がなかったようです。情容赦もなく来るという誇張によってこの句も救われているようです。

掃除器の袋に一円吸い込
れ 美由起

着想のよさが生きている句であります。一円玉の軽さと共にその価値までを風刺している句といえると思ひます。

戸袋へ御荷何代か煤けてい
東天紅

旧家のあるところに焦点をのけて句にしていますが少し時代的な感じを受けるのが弱点とも言えるでしょう。

傘袋雨のベンチに置き忘れ
句念坊

まとまった句であります。置き忘れたのがベンチであったのがこの句を生かしています。

次回課題は少しむづかしいかと思ひますが孤独というのを出します、頑張ってください。

次回研究題「孤独」 五句以内

発表 七月号の予定

次回研究題「孤独」 五句以内

発表 七月号の予定

大阪府南河内郡美原町丹
上四〇四 清水白柳

初産



菊沢小松園選

初産の知らせは派手に伝えて来 博友
もう一人欲しいと初産の苦を忘れ 照子
婦人雑誌の智慧で初産助けられ 圭水
初産が近く社からの帰り早くなり 黒天子
初産は男児母乳の有難さ 隆史
男の子産んで初産偉がられ 九文銭
はじめてのお産にボクサ待ち切れず 光道
初産の度胸三十過ぎてから 雪美
初産へ実家の母が馳せ参じ 隆文
初孫が見たいと産制知らぬ母 光郎
宮まいり初産らしい抱きっぷり 天悟空
もう一人居るらしい初産慌てたり 静子

集路

脂汗ながした初産こわく聞き 雄々
母となる期待初産の苦に耐える どんたく
初産へ里の父まで落着けず 一鶴
初産へ近所の好意身に泌みる 淀月
初産へ形見のゆかたもおむつにし たけお
初産へ男世帯の日がつづき 初甫
初産へ何ちらでも好いとほめておく 保夫
初産へ慌ててみたがすることなし 運太呂
初産は案じたよりも軽うすみ 頑柳
お坊ちゃんですようらしい父になり 雄峰
初産へお守りばかり貰って来 同
初孫を待つ身の方が落ちつけず 与太郎
指折って父となる日をよんでゐる 五丁楽
初産へ夫は出たり入ったり 一峯
初産へ嬉し涙で父も折れ 八郎
初産へ古いおむつも母が出し 宗太郎
初陣のように初産はめたたえ 藤波
初産の医学体験と折れ合わず 八九寸
初産でインスタントの日が続き 豊平
初産は五体揃うただけでよし 晃男
初産を世間は別な目でみつめ 南宗
初産にこりて制限すると決め 庸佑
産室へ飛び込む長靴はいたまま 清風
初産の生れぬ先に名が決まり 孝正
初産の生はきびしきものと知る 同
俺の子かこれがと初産覗き込み 生薑
共稼ぎ初産などと言うとれず 季賛
初産をしてから急に世帯じみ 愛鳩
初産にパパとなる身のおきこ 惠二朗
初産に花の便りも床の中 蛙水
初産を案じた顔がはこころびる 旭峯
肩で息する女房をふびんがり 痴亭
初産も闇から闇に葬られ 石峰

初産の日から猫の子はつとかれ 好女
初産へ夫立ったり坐ったり 古心
初産の腹大げさにあつかわれ 麦足
一姫の期待が太郎で安産し 瑞歩
初産へ御苦労でしたと声をかけ 同
初産を労わる姑の眼と出合い 雄声
初産も二号としてのつつましき 美郎
初産に双生児を産んだ照れ臭さ 十九平
初産の不安廊下を往き戻り 昌明
初産の妻のやつれのいとほしく 久雄
初産へてんやわんやの夜を送り 孝風
初産に廊下も固唾のまされる 圭井堂
佳
初産へ神も仏も頼られる 九文銭
母となる苦しみの手を握り 勝子
初産へ無事な母子の声がする 初甫
初産はみんな四角になって見え 祥月
陣痛に初産堅く堅くなり 同
人
初産のときはど二男騒がれず 天悟空
地
初産は指しらべたり顔みたり 野迷路
天
はじめての陣痛男をみな憎み 光道
軸
初産とばかり夫は信じ切り 同
線路
平行線私鉄もうけて国赤字 美郎
これからは線路が変る赤字線 季賛

長野井蛙選

線路行く思慕へ汽笛が遠く消え 孝風
線路遙かわしが国さは雪とやら 雄声
初産まで仕事が続く線路ざわ 庸佑
釣竿も線路づたいにもどって来 雄峯
一文なし線路伝いに辿り着き 晃男
只乗の線路づたいに逃げる奴 句念坊
寄添うて線路づたいに歩く恋 卯之助
二本のレール一本に見えるまで送り 初甫
手を振って線路の下に孫と祖母 照子
増発へ線路は今日も酷使され 圭水
新ダイヤ線路思つくひまもなく 久雄
終電の消えた線路の憎らしき 同
高速道路線路尻目に走り抜け 豊年
廃坑になって線路も錆びたまま 代仕男
死神の誘う線路に陽が沈み 古心
天国へ急行線路枕にし 勝子
行詰る邪恋は線路で清算し 痴亭
血を吸うた線路ぶきみに灯に光り 愛鳩
線路まで来たが覚悟が又かわり 周甫

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋
丹室月堂

電南セニセニ

線路わき地蔵が立つた事故現場 九文銭
 線路まで来た洪水の爪の跡 圭井堂
 山津波線路を船のように曲げ ひろし
 ダンブカー線路を塞ぐ事故となり 雄声
 徒歩連絡線路を愚痴の列にする 和三郎
 公約の線路がつかずまた選挙 藤波
 線路敷く約束だけで当選し 野迷路
 大臣の声で部落に線路敷け 蛙水
 選挙前線路もつけば駅も出来 八郎
 政治力赤字路線をまた申し 宗太郎
 鉢巻が線路の上に座り込み たけお
 線路での赤字はバスで埋め合せ 十九平
 日に五本駅長線路の草むしり ろ亭
 僕の汽車ババが工夫で線路布き 孝正
 八畳の間に環状線の僕の汽車 ひろし
 ビール瓶線路曲ればまたころけ 雄々
 汽車のトイレ覗けば線路が走った 生薑
 かにつ線路横切る雨上り 大八洲
 紀伊の海春をのたりの線路下 八九寸
 ローカル線ペン草を撫でてゆき 瑞歩
 ラッセル車線路の雪を蹴ってゆき 祥月
 松川の推理へ線路があざ喰い 素風

佳

政治家の引いた線路はカーブを 博友
 線路工事ここから徐行を頼む旗 光郎
 菜の花へ線路が消える童唄 和三郎
 トンネルを田舎さしにする線路 淀月
 新線路廻れ右した店構え 八九寸
 置石をした犯人のつづらな目 恵二朗
 線路下に馴れて素直な子に育ち 藤波

人

家出の子線路を大阪まで歩き 十九平

地

キシャボツボ畳のふちをすり破り 恵二朗
 天
 少年の復讐線路に石を置き 十九平
 軸
 たくましい商魂線路へ向いて立ち

手さぐり

本多柳志選

手さぐりで十円玉をつまみ出し 博友
 手さぐりで未知の世界の灯にぞむ 弘道
 手さぐりで所かまわぬ婦人科医 祥月
 留守番の手さぐりでのおやつ見つけ出し 雪美
 手さぐりでルージユをさがし退庁時 光道
 手さぐりのまんま定年来てしまひ 九文銭
 手さぐりが巧く子守を手古摺らせ 隆文
 手さぐりの盲女触つて杖と靴 隆史
 手さぐりでオツパイさる子で楽し 秀峰
 手さぐりのような渡世にあげ暮れて 晃康
 コンバクト先手さぐりに呉れてやり 句念坊
 手さぐりの全神経を指に込め 豊年
 手さぐりでここまで来たがいさづまり 庸佑
 手さぐりに月給袋の封を切り 照児
 電灯がついて手さぐり笑い合い 南宗
 手さぐりが当り算線逆ばかり 八九寸
 手さぐりの浮世教祖が神に見え 孝正
 手さぐつ当らぬ筈のくじを引き 良圭
 オートメヘ未だ指先が物を言い 清風
 手さぐりの抽き当てでいる当り籤 藤波
 手さぐりの商法でいて儲けとり 八郎
 手さぐりのお料理業し新家庭 一峯
 手さぐりの医者に患者は任せきり 千翁

手さぐりでやんわりと来る女の手 蓮太呂
 手さぐりの方がびつくりした悲鳴 雄峯
 ご機嫌をとる手さぐりはうろはね 与太郎
 へまばかりさぐる浮世の明旨 野迷路
 かくし芸にわか按摩も堂に入り ひろし
 手さぐりで出れば盲目と知る芝居 光郎
 停電にマッチ探せばバツと点き 勝子
 真からの闇手さぐりで露路を折れ 静水
 停電の茶棚へ両手泳ぎ着き 和三郎
 手さぐりで望す技術を危なかり 雄々
 手さぐりでフランスアメリカ歩いて来 どんた
 手さぐりへ女覚悟の目をつぶり 一鶴
 眼をつぶり手でさぐる沙千狩 淀月
 手さぐりで台所の水飲みに行き たけお
 手さぐりで夜業の鍵をおろして出 初甫
 手さぐりの勉強いつか物になり 照子
 手さぐりで握る彼女の手のぬくみ 晃男
 手さぐりはあと一寸で脇に向き 宗義
 手さぐりで握り合つて置こた 杏花
 手さぐりのような愛情はがゆがり 愛鳩
 手さぐりの暮らしへ大きな虹が立ち 旭峯
 捜査難航また手さぐりの城を出ず 生薑
 手さぐりが思わぬことにけつまずき 季賛
 手さぐりの指炎えている肌に触れ 古心
 手さぐりで嫁を選んだきもつ玉 弘朗
 手さぐりで乳房おさる子がねむり 卯之助
 手さぐりでやつた商売図に当たり 雄声
 人生は夜手さぐりで行く姿 十九平
 手さぐりで馴れて便所へ灯を点けず 孝風
 手さぐりで出したチップが大きすぎ 五丁楽
 手さぐりで生きる希望を失わず 圭水
 手さぐりのマッチを鼻の先でやり 宗太郎

佳

品質優良
タチカワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワ紙
 タチカワ
 立川ペン先株式会社
 大阪市東区常盤町一丁目十一番地

手さぐりへ足おもむろについていき 代仕男
 手さぐりのような研究まだ続け 蛙水
 平泳ぎ型の手さぐりけつまずき 恵二朗
 釣銭をポケットの中で数えて見 一勝
 新築をもう税務署に手さぐられ 石峰
 手さぐりの旨に生きる道をきき 瑞歩
 手さぐりで捜すマッチは逃げてゆき 美郎
 停電をばやいてマッチ迄の距離 昌明
 手さぐりで変らぬ愛を誓い合い 久雄
 人
 手さぐりの何か掴んだ叫び声 圭井堂
 地
 手さぐりの杖のありかへ灯を向ける 大八洲
 天
 手さぐりで出れば明るい星の空 保夫
 軸
 ボーリングまだ手さぐりの城を出ず



柳一界一展一望

句会

▼本社五月句会は七日(月)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。連休明けを川柳句で引き締めて頂くよう柳友多数御誘いの上出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は四月十七日(火)午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は四月十九日(木)午後六時半から難波親和クラブで開催。▼コトヨ川柳会(大阪市)句会は四月二十日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳句会(四月二十八日(土)午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼はちのへ川柳社創立三十周年及び句集「すて石」出版記念川柳大会は昭和三十七年五月二十日(日)午前十時から八戸種差海岸旅館「宝台」で開催。▼正木十千樺夫妻の喜寿金婚を祝う会は五月二十七日(日)正午から東京都江戸川区上一色町天祖神社境内上一色会館儀式殿で開

催。兼題黄金・いつまでも、各題三句、投句は会費百円同封のこと。▼岡山県下川維各支部連合春季吟行大会は四月十五日(日)鷺羽山で開催。▼函館川柳社四月例会は十五日(日)午後五時半から千歳町千歳会館楼上で開催。▼第八回愛媛川柳研究大会は五月二十日(日)午前十時から今治市南大門通今治小学校で開催。兼題、新茶・月曜日・ショック・逆ねじ・ローマ字・海賊・無茶苦茶・各題三句、投句は五十円封入の上五月十日迄に今治市風早町四米子映月方汐風川柳社宛毎日賀茂川柳大会(広島県)は五月二十日(日)午後一時から西条町耕道会館で開催される。▼山形県川柳会主催春の東北川柳大会は五月十三日午前十時から米沢市織物組合階上ホールで開催。▼函館川柳社では故池田竜歩氏の一周年忌に当り遺句集を発刊することを決定、目下予約を応募中。詳細は函館市青柳町十七函館川柳社へ。▼幸菱川柳会(名古屋)は四月十四日に春の吟行を催

され知多荘から柳友の寄書を寄せられた。▼阪急百貨店美術部(大阪市)で四月廿四日から二十九日まで岸本水府作品展を六階美術部特別陳列室で開催。▼故浜夢助川柳句碑建立寄附金が募集されている。建立予定場所仙台市西公園、建立時期は昭和三十七年十月中旬の予定。応募は一口二百円仙台市東八番丁一七〇川柳宮城野社句碑建立準備事務所。▼消息路郎主幹は四月十四日大阪府主催の文芸懇話会に出席、来賓の久保田万太郎氏と交歓された。▼若本多久志氏(西宮市)は四月三日日本ライオンズクラブ十周年記念式典へ参加の為上京、祝宴のあとでミカドというレストランシアターへ行きましたが一日の収入が四五百万円だそうでおどろきの外はありません。▼尼緑之助氏(出雲市)は三月二十三日所用のため上京、久しぶりで東京の空気を吸われたが、その目まぐるしさに驚嘆された由。▼丸尾潮花氏(高槻市)から、眼の方は二月中旬頃から少し良くなっているようですが何分片眼で見ているので一方の眼を酷使することになり非常に疲れますとのこと。▼正木水客氏(大阪市)は大鉄局運転部から、辻白溪子氏(高槻市)は天鉄局運転部からそれぞれ四月一日付をもって国鉄関西支社保安課へ転勤された。▼中村九呂氏(下関市)は四月八日別項

記載の住所へ転居されたが、旧居から約三百米南の新居へは会社、隣組、親類の人達の手で速やかに引越しを済まされた。▼「初夢は借家の染が抜けきらず」▼阿部佐保蘭氏(東京都)は令息がこの程一橋大学社会学部に入學され、七月末には令嬢の出産予定で初孫の顔が見られるとのこと。▼山田季賛氏(広島県)は四月七日本社句会に大阪、広島からの遠路をものともせず、全出席を続けていられるが、同夜は春巢氏宅に一泊、八日は故郷の滋賀県へ帰り農業用ダム建設現場を見学された。▼富士野鞍馬氏(東京都)は四月十一日に京都タカラビル工場落成式の招待で入浴されたが、たまに出ると疲れますとのこと。▼根上杏花氏(金沢市)から、北陸地方も冬の衣を一枚一枚ぬいで春めいて来兼六公園は毎日多数の観光客で賑わっております。▼紅梅も笑顔を見せて北の国。▼愛媛県川柳文化連盟が再建され、若い柳人の養成と川柳界の興隆に寄与する為の種々の行事が計画されることとなり、長野文庫氏(今治市)が同連盟の理事並びに副会長に就任された。▼鈴木青柳氏(函館市)から路郎主幹へ、花童賞選句の礼を述べられ、北海道も四月に入りましたらようやく春らしい暖さとなって参りましたとの寄信があった。▼西辻竹青氏(奈良県)は四月九日の夜便の「こがね丸」で高浜港着、

四国巡遊の旅に出られたが折悪しくストに会い道後までトラックで運ばれる破目となった。併し道後の湯は格別で心ゆくばかり静養が出来二、三日滞在の後金刀比羅詣での予定をしていられる「停年退職後の花も散りごろ」▼山田スミ子さん(広島県)は最近原因不明の貧血で大変に弱って居られるとのこと、速かな御快癒をお祈り申上げる。▼水谷竹莊氏(大阪市)は別府から耶馬溪を廻り博多の玄海荘から旅信をよせられた。佐賀県の武雄、嬉野の温泉へ廻遊帰阪の由。▼前田欣一郎氏(松山市)は三月二十七日米洞、亡父佐健句集「野球拳」を持参され主幹夫妻と歓談された。▼山田常楽氏(福岡市)は三月二十九日大阪、時間の都合で難波から電話で渡乃女史と談され東上された。▼若林草右氏(西宮市)は大阪通信病院副院長の要職を三月二十一日限り停年勇退された。氏は同病院川柳会会長故尾崎方正氏のとをうけて会長となられたが退職とともに三月句会で辞任され、後任には足立春雄婦人科医長が就任された。▼月原宵明氏(松山市)は伊予銀行新居浜支店から本店の総務部長に栄転赴任された。▼市場没食子氏(大阪市)は淀通信病院薬局長の要職を三月末に停年勇退された。▼西辻竹青氏(奈良県)は三月二十一日大阪通信病院を停年勇退された。▼河相すゑ氏(西宮

不朽の人々



先生自道の北海一夫氏

国鉄関釜航路三十年、外航七年、現在陸にあがったカッパで、何の芸もなく、日耕晩酒の毎日、書は天来の拙筆家、然も、口・手に至っては、共に四丁足らず。酒は第二の愛妻であり、牧水流の飲み手、静かに降りそそぐ春雨を眺めての酒趣、殊によろし。

明日はまた僕の血となる僕の酒

(不水)

国鉄関釜航路三十年、外航七年、現在陸にあがったカッ

パで、何の芸もなく、日耕晩酒の毎日、書は天来の拙筆

家、然も、口・手に至っては、共に四丁足らず。酒は第二

の愛妻であり、牧水流の飲み手、静かに降りそそぐ春雨を

眺めての酒趣、殊によろし。

飛・燕・往・来

★築山快夢起氏より(ホノルル市)

一西乃記

当地は雨期も終り晴天が続くと日中は相当暑い。春の行事極まつりも一週間程前から開始、ク

インコンテストには西野あや子さんという十八才の布大学生が当選戴冠式やパレードやらで満都の注目を集めています。又日本文化展

があり、東京民謡団の一行が日本各地の民謡と踊りを見せてくれ、招聘された松竹歌劇団の出演もあり

ります。今日は灌仏会ですので仏教側は花まつりをワイキキ公園でやることになり新聞ラジオで大宣伝をしています。こんな様子を毎日見聞して居ますとこれがアメリカの一部だろうか

と錯覚を起してしまうのです。(以下略)

★岩崎愛二氏より(東京都にて)

一露郎・霞乃記

本日藍綬章をいただきました。

「人みればやたら挨拶したくない」「天皇さま今日は「アー、ソ

ー」のたまわす」四月十九日

★

★

えがする。B6版二八六頁、定価三九〇円。

慶 甲

▼中村呂久平氏(下関市)は三月二十一日国広静子さん、との縁談整い昭光商事株式会社肥前里社長夫妻の媒酌により市内上新地町事務所大広間で華燭の典を挙げられた。お慶び申上げる。

▼西田柳宏子氏(大阪市)の母堂きぬさんは三月二十七日脳溢血のため死去、年七十九。謹悼。

転居

▼浜田久米雄氏は岡山市弓之町鉄道宿舍三ノ一へ転居。▼中村九呂平氏は下関市上新地六町二五〇七へ転居。▼橋原万女さんは大阪市西成区松原通り一ノ二五松岡辰五郎方へ転居。▼野々口美舟さんは岡山県総社市赤浜二九へ転居。▼梶川蘇堂氏は西宮市愛宕山町二九ノ

一へ転居。▼浅村紅の花氏は金沢市金石本町一八九ノ三へ転居。▼根上香花氏は金沢市堀川角場一〇北陸製菓KK内社宅へ転居。▼月原智明氏は松山市道後岩崎町三二五へ転居。(重)

不朽洞会から

★新会員紹介

三月

▼中内学彦(大和郡山市)正

四月

▼杉本一鶴(貝塚市)正

★洞友推薦

★山本丹路氏(東京都)は奥村丹路氏の昔から、川柳雑誌社のため陽に陰に多年力を尽されたので本年一月にさかのぼって、洞友に推薦されることとなった。(多)

市)は社用で十七日下関、十八日長崎へ出張され、「観光へ衣がえした原爆地」の句信を寄せられた

▼工藤甲吉氏(青森市)は東奥日報社の社の異動人事で政経部長から編集局長に栄転された。「当分はこそばゆく居る回りイヌ」の句を寄せられた。およろこび申上げる。

句集

▼故前田伍健遺句集「野球拳」が昭和三十七年三月二十日、令息前田欣一郎氏の手で編集発行された遺された句帳に自愛選として印がつけてあり、いわば自選句集の途がついていた訳ですと発行人がそのあとがきで述べて居られるが、自愛句を中心に生前の句が収集されている。水府氏と路郎主幹の序がある。B6型二百七十九頁、定価四百円。発行所は松山市真砂町

▼故前田伍健遺句集「野球拳」が昭和三十七年三月二十日、令息前田欣一郎氏の手で編集発行された遺された句帳に自愛選として印がつけてあり、いわば自選句集の途がついていた訳ですと発行人がそのあとがきで述べて居られるが、自愛句を中心に生前の句が収集されている。水府氏と路郎主幹の序がある。B6型二百七十九頁、定価四百円。発行所は松山市真砂町

金 泥 集

課 題 「心 配」

麻 生 葭 乃 選

のはんでする心配も忘れがち 阿茶
心配の母は舞台の袖で待ち 同
心配と縁遠うなった顔のつや 同
心配事あるというのにもういびき とも子
心配をかけぬ積りの嘘も書き 同
小使の心配もして姉女房 同
心配をよそに冬山又出かけ 酔夢
事故かとも心配させて酔った彼 同
新米の運転横でひやひやし 同
ちよつとやそつとの心配では瘦せぬ 一栄
不身持へ母の心配つづくなり 同
わりきつて終えば心配などおかし 清子
心配の絶えた事なく五十年 同
電話では安心出来ずまた出かけ きさ子
三泊の旅へ立たせる守り札 同
心配をする母が居て踏みきれず 周甫
心配を知らない猫に愚痴を云い 同
旅へ出た子へ心配な雨が降り あやめ
合格へ心配してた母が泣き 同
良縁というのに母は心配し 俊江
心配はしても顔には出さぬ父 同
体重を心配容赦なくけずり 春栄
心配が今日も不眠にしてしまい 同
目で追うて心で拝む子の番号 美代
無事帰るまで母は祈っていてくれる 美喜
酔っぱらいをバイクで去なしたものの 勝子
心配をした甲斐あった子が育ち 好女
苦勞性へ気になる事が又生まれ 腹乃

次回題「皮」／切五月末日

・ 一 筆 寸 言 ・



母のこと・

変体がなのこと

・ 八木摩天郎 ・

なさぬ仲、腹の母、三人の母
母の無い子はない。草木が大地を
母として育つように、我等は母に
依つて育つた。亡き母を呼ぶのに
「パパ、ママ」では感じが出な
い。父上、母上では、武士の奥方
のようだ。お母さんと呼ぶところ
に無限の母の尊厳があり、親しさ
がある。亡き母を追慕して「おか
あさん」と呼んで作句するところ
ろ、良い川柳が生まれ、「いのち
ある句」が生まれるかも知れな
い。

学問として古典を学ぶこと
も、文芸作品にどんな字を用いよ
うと、額にどんな字を書こうが、

変体がなは明治三十五年にやめた
が、短冊に書くことは、いっころ
差しつかえない筈だ。僕は今後共
短冊に変体がなをつかつて川柳句
を書いて子孫に残すつもりだ――
子孫も困るだろうとは思うが……

續
川柳書架

(19)

川柳信濃国

(母袋未知庵著)

★本書巻頭の著者の小引から、

一、本書は、古川柳即ち江戸時代
に詠み残された川柳狂句雑俳を通
して、信濃国の史蹟、名勝、神社
仏閣、伝説、其他に就て述べたも
のである。従つて本書の内容は古
柳に詠句のあるもののみに限られ
てはいるが、併し夫等の中に、信
州の史蹟名勝其他の主なるものは
略々その総てが尽されているもの
と思う。(以下略)

★目次概要を左に、

一、信濃国と信濃者 二、磯米峠
三、川柳狂井沢 四、東信濃と
ところどころ (其一) 一五、東信濃
ところどころ (其二) 一六、姚
拾山と田毎月一七、川中島合戦
一八、北信濃ところどころ (其一)

六、川柳戸隠山一十、北川柳善光
物語一十一、信濃ところどころ
(其二) 一十二、西信濃ところど
ころ一十三、諏訪明神と諏訪湖一
十四、南信濃ところどころ (其二)
一十五、南信濃ところどころ (其
二) 一十六、木曾谷と木曾街道一
十七、木曾路の名所名物一十八、
朝日將軍義仲。
★昭和二十四年九月二十日発行。
B6版二九八頁。定価二百五十円
発行所、松本市大名町七一
しなの川柳社。
★著者は江戸文学研究家として有
名。

句集

詠ふ人々

(岡橋宣介選輯)

★本書の巻頭に選輯者岡橋宣介氏
の「巻首に誌す」があり、「あと
がき」によると「本句集は「せん
ば川柳社」の創生を記念し、よろ
こびを具にするため、創刊第一年
(第一巻第一号乃至第十二号)の
「せんば誌」上に登載された同人及
び誌友の雑詠を鑑査して選輯した
ものである」云々。

★昭和二十六年三月一日発行。B
6版九四頁。価額三〇〇円。発行
所、大阪市東区平野町三丁目二七
★本句集の選輯者岡橋宣介氏は現
在大阪市阿倍野区北畠西一丁目
で「せんば川柳社」を主宰。



「へそくり」 入選発表

麻生路郎 選
投句総数 四百七十六句
入選 五十四句

生き恥をかかずへそくり役に立ち
借りて来たのよとへそくりしらば
くれ
へそくりも五桁になってこわくな
り
なんとかしようとはへそくり出す
つもり
棄てられる予感がへそくりあせら
せる
へそくりはないと言ふ顔してる妻
年頃へ母のへそくり追いつかず
へそくりをせねばと嫁が来て以来
嫁の座についてへそくるコツを知
り
へそくりがばれた投信の年賀状
へそくれど結局夫のものを買い
二次会へ行くへそくりを確かめる
へそくれた金はツバメにあてにさ
れ
へそくりで足りぬ陳列見て歩き
へそくりのことも知ってる親日家
へそくりでやりくりしとく十二月

へそくりを今日は書棚に疎開させ
禿げたのへ媚びてあまたの預金帳
へそくりの通帳会社内と書き
お祖母ちゃんのへそくりアルミ貨
もまじり
へそくりをひやひやさせて株動き
税金のようにへそくられへそくら
れ
へそくりもベースアップをしてこ
まし
へそくりの利子で二泊の湯につか
り
へそくりも忘れていたとはいひ暮
し
古本はへそくり抱いたまま売られ
へそくりへあたまを下げた十二月
へそくりの仕方も嫁ぐ娘におしえ
へそくりをおいてく母へ手を合わ
せ
借りて来てあげたとへそくり融通
し
へそくりを忘れてとうとう死なな
った

へそくりを秘書の名義にしたが縁
へそくりが貯った頃に不肖の子
へそくりも出来て実家へ遠ざかり
へそくりへいざ鎌倉の多いこと
へそくりを拾った判で預けるとき
へそくりで買えない汽車を孫ねだ
り
へそくりの置場に孫の眼を盗み
へそくりでネエやに買った特価品
へそくりで買ったと妻のぬけぬけ
と
新婚早々へそくる術は心得て
月一の利息へそくり欲が出る
種明かししたへそくりはタカが知
れ
税務吏もツイフのへそくり見破れ
ず
こんなどこへへそくられた妻の
留守
見えすいたとこへもへそくりかく
しとき
五客
贅沢なねずみへそくり巣にしている
台所譲ってへそくり底をつき
養鶏をやる気のへそくりおいて死
に
へそくれた日のちゃぶ台は野戦食
聖徳太子八つに折ってへそくられ
た

入ノ句
地ノ句
天ノ句
ノックして這入れとへそくり怒っ
てる
昭和37年度(四月現在)
大万川柳ベストテン
一 藤波 六・五
二 柳里 六・〇
三 好馬 五・五
四 静水 五・五
五 圭明 五・〇
六 恒明 四・五
七 方明 四・五
八 惠朗 四・五
九 清生 四・五
一〇 清秋 四・五
一一 文庵 四・五
一二 生庵 三・五
一三 東平 三・五
一四 遠岸 三・〇
一五 桃里 三・〇
一六 周里 三・〇
一七 岡山 三・〇
一八 岡山 三・〇
一九 岡山 三・〇
二〇 岡山 三・〇
二一 岡山 三・〇
二二 岡山 三・〇
二三 岡山 三・〇
二四 岡山 三・〇
二五 岡山 三・〇
二六 岡山 三・〇
二七 岡山 三・〇
二八 岡山 三・〇
二九 岡山 三・〇
三〇 岡山 三・〇
三十一 岡山 三・〇
三十二 岡山 三・〇
三十三 岡山 三・〇
三十四 岡山 三・〇
三十五 岡山 三・〇
三十六 岡山 三・〇
三十七 岡山 三・〇
三十八 岡山 三・〇
三十九 岡山 三・〇
四十 岡山 三・〇
四十一 岡山 三・〇
四十二 岡山 三・〇
四十三 岡山 三・〇
四十四 岡山 三・〇
四十五 岡山 三・〇
四十六 岡山 三・〇
四十七 岡山 三・〇
四十八 岡山 三・〇
四十九 岡山 三・〇
五十 岡山 三・〇
五十一 岡山 三・〇
五十二 岡山 三・〇
五十三 岡山 三・〇
五十四 岡山 三・〇
五十五 岡山 三・〇
五十六 岡山 三・〇
五十七 岡山 三・〇
五十八 岡山 三・〇
五十九 岡山 三・〇
六十 岡山 三・〇
六十一 岡山 三・〇
六十二 岡山 三・〇
六十三 岡山 三・〇
六十四 岡山 三・〇
六十五 岡山 三・〇
六十六 岡山 三・〇
六十七 岡山 三・〇
六十八 岡山 三・〇
六十九 岡山 三・〇
七十 岡山 三・〇
七十一 岡山 三・〇
七十二 岡山 三・〇
七十三 岡山 三・〇
七十四 岡山 三・〇
七十五 岡山 三・〇
七十六 岡山 三・〇
七十七 岡山 三・〇
七十八 岡山 三・〇
七十九 岡山 三・〇
八十 岡山 三・〇
八十一 岡山 三・〇
八十二 岡山 三・〇
八十三 岡山 三・〇
八十四 岡山 三・〇
八十五 岡山 三・〇
八十六 岡山 三・〇
八十七 岡山 三・〇
八十八 岡山 三・〇
八十九 岡山 三・〇
九十 岡山 三・〇
九十一 岡山 三・〇
九十二 岡山 三・〇
九十三 岡山 三・〇
九十四 岡山 三・〇
九十五 岡山 三・〇
九十六 岡山 三・〇
九十七 岡山 三・〇
九十八 岡山 三・〇
九十九 岡山 三・〇
一百 岡山 三・〇

「川柳家戸籍調
べ」に掲載され

た芳名録 (二)

中山青葉冠(東京) 福田山雨楼
(大阪) 田中ひで一(神戸) 中野
花坊(東京) 牧田憲翠(大阪) 高
木角窓坊(東京) 西本三笑(大
阪) 岡田乃ん気坊(神戸) 水谷鮎
美(大阪) 花岡白樹(長野) 堀楓
林(和歌山) 石井突支坊(尼崎)
中沢濁水(高知) 吉本寛汀(大
阪) 辻左馬(和歌山) 中沼若蛙
(大連) 森下冬青(金沢) 武田彩
霞(神戸) 森井荷十(東京) 古沢
清公子(神戸) 志村天花(山梨)
兼重白鵬(山口) 島田雅楽王(東
京) 中川眼隠子(金沢) 酒井枝呂
(大阪) 三好幸郎(大阪)

須崎豆秋忌

一周年記念句会

日時 5月20日(日) 1時開会
会場 割烹大万階上

兼題 (各題三句あて)
「形見」 川村好郎選
「コップ酒」 西尾 架選
「豆」 菊沢小松園選
「はたる」 清水白柳選
「ふるさと」 松江梅里選

席題(2題当日発表)
★投句だけの方は郵券三十円
封入のこと。

★あて先き 大阪市阿倍野区
旭町二ノ一〇 木村十悟方
川維阿倍野支部

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙、文字は正
確に、締切毎月十五日、投稿先
本社宛

本社 四月句会 (大阪市)

4月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

桜もあすが見ごろという。ここ千日前
自安寺の会場も句の花が満開だ。

さすがに四月ともなれば、ストロブは
敬遠された恰好である。広島から今月も
ご出席の山田季賛氏に、大阪近郊の柳人
諸氏もハッパをかけてご出席願いたいも
のである。

月のうち一日は「川柳の日」として、
本社の句会日だけは4Bと句箋を手にし
ていただきたいとおもう。

川村好郎氏の柳話(17P参照)から四
月句会の幕があく。心あたたる話に大
向うは拍手の連続だった。

こよいはベテランデーで生々庵氏、水
客氏はか新人を寄せつけず、特に天位安
賞諸氏の平均年令を六十才とみた。青年
作家よ、奮起せよ、と叫びたい。

(F)

出席者——路郎・静馬・八郎・水客・一
瓢・黙平・泰泉・すゝむ・山地・文秋・
庸佑・生々庵・一三夫・阿茶・玲人・好

郎・和郎・大丘子・梅里・清風・南宗・
薫風子・繁雄・静幸・弘・圭井堂・圭水
・狂二・柳安子・舟遊・白柳・多久志・
柳志・メ女・専翁・雄声・真砂・いわを
・奈良子・栗・青風・恒明・季賛・宏子
・茂乃

兼題「家出」 麻生路郎選

泣き落としよりも家出がはやくき
十代の家出見破るママボリス
家出した東京生れな不思議がり
家出して来たが話と違いすぎ
家出先知ってる伯母は折れすぎ
複雑な家庭が家出する娘に育て
西郷像見上げ家出を悔いており
また家出かと親類もとりあわず
おちるだけおちて家出をくやんで居
家名に傷つく家出をまたかくし
差別と言うショコラ 秘めて家出する
家出かときくばらんに尋ねられ
甘かった鎖を悔ゆる保護願
家出して添えた当時はうれしがり
家出にも方角があり易で決め
ただ何となく家出して来た春の街
就職と家出おんなじ駅へ下り
おしとやか家出まじ娘と見え
詩集だけ持った家出であやぶまれ
反抗期何かと言えば直ぐ家出
東京の空は家出になじまない
あてもなく家出の靴をはいた子ら
三男の家出びっくりしてくれず
春うらら家出の荷を持つパトリック
感情にはしる家出はすぐ帰る
芸者する母をたすねて来た家出
早朝の駅で家出と見られたり
敢然とノラになる気が舞い戻り
六十を越した家出は哀れなり
親切な私服家出に疑われ
静馬

兼題「声優」 正本水客選

声優の声で美人と決めている
清水昆の河童を想像さす声優
声優のこども同んなじ狭き門
声優はマイクへ台本をそとあけ
人気には遠く画面に声を入れ
声優は欠伸の声も出している
自信ない顔声優に志願をし
人形と共にちろりん村に生き
声優の元祖シノノドベルジララ
テレビタレントと洋画の影の声
声優の強み歌舞伎もいける伎倆
イメージのまま声優のプロマイド
悪役は悪役なりの声がかい
ドスの効く声で調法がられとり
殺される役声優は無表情
声優の声へフアンのレター来る
声優で生まれ映画に引き抜かれ
イメージとびつたり声優心得る
撃ち合いに声優同志身構える
吹きかえの音がきれいなローランド

兼題「心臓」 真鍋一瓢選

最後の一押し心臓ものを言い
名優もあたら心臓麻痺で死に
わが心臓へ来るメスみてはるモット
心臓の音を聞いているノイローゼ
心臓で行けと純情はげまされ
心臓の鼓動見せたいラブレター
心臓が弱いと言ったを真に受ける
顔面を割っても平気である社長
溜つてから心臓へ手をやる癖になり
心臓で頼むと交渉委員にし
心臓が臨終の座を永びかせ
心臓をボスの養子に見込まれる
心臓がボツボツ無理を言い始め
鏡一つまた心臓が顔を出し
奈良子

兼題「求人」 松江梅里選

お手伝いと言って女中の使い方
月給をせり上げてくる求人難
求人欄妻子を満たす職が無し
九千万されど人なし人がない
条件の多さのみ込む求人難
求人へ勸誘の子はそっぽむき
使う方が使われている求人難
求人に職安赤い舌を出し
求人にあえぎ当てなき小企業
求人の方がベコベコ出迎える
お手伝いさんが欲しいと春になり
求人の際の甘言まだたり
求人へ頑張る腹の減った音
優遇と大きく書いて求人求む
内幕を知って求人集まらず
穴当てて求人欄へふりむかず
優遇す年令問わず張ったまま
求人欄高給すぎて不気味がり
優遇という条件に引っかけり
求人へ口は達者なくずばかり
定年はキツチリと追い求人難
求人欄老眼鏡でのぞきこみ
白柳

麗人と媚てて虚栄かり集め
 つてのつてから家政婦に来て貰い
 求人人のビラへいたずら書きをされ
 求人難それに失保は列をなし
 来年にする求人あきらめ
 さんづけて乗せて女中来てがなし
 求人欄読んでしまつて涕をかみ
 石橋を叩く求人ひまがいり
 人材を求むと期待はしておらず
 求人むビラにひやかしばかり
 求人欄ベンチの隅で拾ひ読み
 老若美醜贅沢いわぬ人不足
 優遇すだけ数字はボカしとき
 女性ならこんな儲かる求人欄
 この年で適うのは雑役とは淋し
 求人を探り食ひにして渡り鳥
 求人人の食指が動く八頭身
 釜ヶ崎求人ピラの上へピラ
 集団で来た求人へ鯛をつけ
 ダブル着て働く人を探しにき
 求人へ三日坊主もまざれ込み

席題「無邪気」 石井黙平選

好きな事させば無邪気によく遊び
 入選に無邪気に顔をほころばせ
 官服を脱げば子供と腕角力
 今日もお休みと失業無邪気なり
 泥んこに遊ぶ無邪気へ目をむり
 勝つていて共に泣いてる無邪気
 いつまでも無邪気な娘に親慌て
 恋人へ無邪気な父と引き合わせ
 無邪気をば売物にする手強い娘
 冗談も言わぬ社長にある無邪気
 無邪気だと思つた娘にひもが居り
 無邪気さも失せた制服きらい出し
 無邪気から恋が生まれるともらず
 かくれんぼ無邪気な子にせがまれる
 無邪気など言つ泣かした母の通夜

圭井堂 柳志 阿茶 狂二 白柳 静馬 柳志 阿茶 多志 玲人 柳宏子 生々庵 静馬 一三夫 柳宏子 生々庵 照兒 舟遊 水客 梅里

信号の赤へよちよち歩きの子
 お見合いへガムが無邪気にお気に召し
 無邪気もう金の値うちを知つた欲
 無邪気その中にも知恵の伸ひを見せ
 子の相手無邪気なおとなできあがり
 親はまだ無邪気と見てる娘の仕草
 無邪気さにつられて叱るのを忘れ
 やるものをねば使ひは無邪気なり
 十円でどつちにもつくりの無邪気
 キャンチボール子にどまされて脱ぐ上着

席題「風船」 金井文秋選

風船玉のうたが女房に割り切られ
 風船に託すよい子の花の種子
 風船へ善意を托す花の種子
 風船に乗ってゆきたい夢の国
 肺活量子の風船についてけず
 風船が夜店に浮いて夏をつけ
 買物も風船くれる店にゆく
 風船はもうて葉は買わず去に
 せがむ子へ風船玉が笑いかけ
 糸きれて風船自由取り戻す
 煽られて風船勘ねてゐる姿
 風船を押えつけてるアーケード
 風船をふくらす顔の面白さ
 風船が行くえ定めず空に舞い
 風船が泳ぐ父ちゃんの肩車
 かんしやぐの子に風船も爆破する
 生酔に持たれ風船かぶり振る
 子の数の風船くれて置き棄
 くす玉を出てから風船しやう飛び
 風船がのんきに揺れる満員車
 アドバルンあれを買つてだをこ
 風船のように凡愚の浮くも春
 天井に逃げて風船朝になり
 風船もしばみ背中の子も眠り
 風船がしばんで祖母の顔に似る

生々庵 阿茶 柳志 梅里 山地 青風 奈良子 柳宏子 恒明 黙平 圭井堂 白柳 南宗 生々庵 青風 蕉風子 狂二 一瓢 狂二 雄声 水客 柳志 白柳

席題「きめ手」 本多柳志選

札束を見せて女の返事さく
 アリバイをくす決め手が見つからず
 金貯めるきめ手は二号に働かせ
 写真判定がきめ手となつて穴が出る
 きめ手まだ成らず赤旗ひるがえり
 面通し決め手になった泣きぼくろ
 きめ手とは黒の四三があとになる
 きめ手ない儘送られた知能犯
 悠々とトイレへ立つた王手飛車
 仲夏の縁がきめ手でスト終わり
 ビシヤリと音がしる極め手なり
 最後まできめ手を伏せてある原稿
 きめ手にもなれてまたからしめられ
 きめ手とは知らずカッパを穿たされ
 手切金極め手のつもりが子が生れ
 吹いがらの指紋がもて直ぐあがり
 タレントの十八番という仕草
 横綱も決め手がにぶる年になり
 判決のきめ手をはばむ黒い霧
 弁護士が替りきめ手をくつがえす
 妻楊枝きめ手を誰も持つていず
 まだきめ手出さぬに惜しい時間切れ
 だたん場できめてとなつた左きき
 刑事室きめ手になったインシアル

(庸佑清記)

淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞選

録音機吸そのまま吸をする
 道連れが出来て休まぬ一年生
 退屈と道づれして一人旅
 道づれが出来て懐中巾にかかり
 いい道づれだったのに先き立たれ
 人生の道づれになる式を挙げ

生薑 東洋男 礼司 句念坊 一鶴 水洞

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

茶柱が立って場外馬券買う
 茶柱が立たぬものかとのぞきこむ
 青汁を一つ気飲んで生さる欲
 王妃さま名譽総裁席へ着き
 インドネシア人に王妃は花のこと
 母として或る日王妃のさびしき日
 夢多き王妃を乗せし儀装馬車
 桃の花の口絵で雑誌春にする
 桃の花調度古さが落付ける
 桜咲くまでをひっそりと桃の花
 何時通つても掘返されいる道路
 地盤沈下道つぎたされつぎたされ
 近道を本人だけがしたつもり

37年度金出席者 (四月現在)

和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 ・白柳・すゝむ・南宗・柳宏子・蕉
 風子・庸佑・静馬・生々庵・舟遊・
 梅里・メ女・阿茶・雄声・いわを・
 季賛・宏子・腹乃

天位受賞者

④生々庵③文秋・水客②三司・圭水
 ・好郎・静馬・圭井堂・柳志①恒明
 ・一瓢・客遊子・一三夫・雄声・庸
 佑

不朽洞賞杯受賞者

圭水・一瓢・圭井堂・静馬

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

ゴミ箱の中味も貧乏とお金持 風仙洞
おもちゃ箱子供の大事な夢があり 柳宏子
どうせ捨てる箱だとは思えども 一栄
のん気でも子の勉強は気にかかり 文秋
のん気でもなけりや外科医はつとまらず 正一
敏つたう母の涙に子が目覚め 井平
お土産は孫の目覚めを待つ玩具 清子
人間の目覚めにさとい鼠族 京四郎
うぬぼれに答を出した三面鏡 河太郎
うぬぼれたおかげで入試不合格 宇佐夫
うぬぼれの美人見事に落選す 竹莊
白髪まで染めてうぬぼれたまだやまず 章子
うぬぼれは親の光を否定して 珠笑
うぬぼれが覚めて後妻に嫁くとする 白柳
うぬぼれを聞かぬがやに煙草喫い 柳
前祝したうぬぼれが落ちていた

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

無精髭のままで焼香しく仲好 柳宏子
無精髭しまらぬ顔でいて儲け 柳宏子
トランプの好きな女の黒ダイヤ 葉光
花の山陽氣をうつす人の波 漢光
じいちゃんのバリエーション 清風
平だけになって陽気な席となり 正一
進学へ予算を軽く突破する 庸佑
進学へ子を見る親の眼が迷い 柳宏子
あせつたさかに詐欺にひつかり 博也
老いらくのは強壯剤を買い 一三夫
カン高い声でトランプ投げ出され 十悟
あせつても齡しが増え皺が増え 文秋
容赦なく時計が進む受験場 静馬
カムバック二度の寝もつかしあわせ 喜仙
カムバック元の弟子へも辞儀する 圭井堂
復職へひとりふたりの暖かさ 素郎

カムバック神経痛に悩まされ 生福
下心あつてすすめるカムバック 光福
カムバック冷めたい風も少しうけ 梅里

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

口笛のチンピラ明日を持たぬ顔 磯蘭
口笛がつき刺す弱い女の身 紫蘭
食堂は色あせはてた茶を呉れる 鳥雀
相手とは上の意識の言葉尻 和三郎
淡味と地味と小さくもめている 啞雀
速達へ運配はやはり遠慮さみ 親生

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

茶も花も指輪が語る暮しむき 笑有
指輪だけやさしく光る太い指 快夢起
仁王手にでかい指輪の御性格 平八郎
見れない指輪へ母の眼が光り 浅太郎
緑あつてリング貰って三十年 カロ女
亡き母の形見は指輪一つだけ あき坊
婚約の指輪を見ては日を数え 内海
里帰りはめたダイヤを渡され 万里歩
新婚は指輪の方も大事そう 静松
ルビーかな踊る師匠の手が魅力 静紀
本人が本人指輪まで疑われ よし子
新婚の指輪ダイヤが光つて 萩路
金婚の式で指輪が眼を集め 弦月
婚約の指輪をそつと胸にあて 泉月
無理でしつ買った指輪とも知らず エス子
羨望的婚約のニカラット 須磨子
純情の娘指輪を抱いて寝る 押山
人格も鉦金指輪も鉦金なり 柳葉
せめてもの指輪が語る半世紀 晚舟

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

スタートの油断が最後までたたり 三六

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

5月号発売中

150円(〒18円)

特集

乳製品の科学と菓子
製菓用油脂の現状
小麦粉の使用状況
チウインガムの現状と技術上の問題点
菓子の包装と自動機械について
新しいベーキングボーダーの傾向
蜂蜜の現状と将来

講座

食品衛生
官能検査
食品工場
食品品質

- ◇海外ニュース ◇特許ニュース
- ◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社

大阪 市北区 5-4
電話 361-9373~4

大阪 6702番

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

月給を届けるついでの見舞客 眞究
絵はかけぬくせに眉墨うす曳き 素瓢
おみくじの大吉信するはに老い 無閑
二言目世間世間と狭く生き 一机
署名運動金がいらぬいそで書き 天邪鬼
上向いて歩き薄給気につけず 鶴丸
その筋の命その筋は知つとらず 詩郎

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山報

スタートへ母ちゃんの顔が見えず
スタートの当座相性など言わず
新築へ新婚の荷がどつと着き
スタートの遅い大学出に抜かれ
再婚のスタート気苦勞つきまじ
スタートで自分の足にけつつき
スタートが悪く平凡な年をとり
スタートでつまき決勝点でころび
今日のスタート朝の安定所で決まり
スタートに自信ありげな顔でたち
スタートインも俺がという構え
スタートへ乱れる呼吸とこころ
名案が夢に浮んだままに消え
名案が出たひざ小僧かるく打ち
名案がある飲み友達かきぎて来る
虎威の父をかこんだ祝い酒
初孫の片言ごとに大笑ひ

不景気な話へ火鉢冷えて来る 知恵美
姿見に写る猫背の淋しい日 美沙
勉強をせぬ子へ誰れに似てなど 美沙
初恋を思い出させるリバイバル 杏郎
酔眼へ調子を合はす屋台店 仙人坊
パラッとした雪へ小供の夢が消え 竜平
リバイバルよんだ血潮が騒ぎ出し 遠山
リバイバルへも將軍も腰を上げ 七面山
釣り糸の立てる音さえ春めける

倒産の噂をよそに 自家用車 喜夫
食へさせる家族の数へ靴をはく 秀峰
退院へ手術のあとを見せにくる 玲子
平社員根性がない訳でなし 怪山
鼻眼鏡かけて老妻 歌集読む 一男
税金は完納なのにこの道路 青香
大平の春を乱した山の事故 露生
新橋の食卓赤字も盛ってあり 雄々
福耳で今日も株式市況聞く 雄々

杏林川柳会

(大阪市)

中島生々庵報

殊賈賈ただ偶然と云っただけ 一哲
急な客火鉢のスイッチ入れておけ 野迷路
席ぬけて女将と話す長火鉢 腹乃
童心を売りものにして笑わせる 一伸
童心に親の気嫌が反影し 五十六
童心の中にも怒はちよつとあり 小石
童心に憎く写ったダンブカー 阿茶

大阪通信病院川柳会

(大阪市)

橋本幸男報

廻診に今日退院の化粧をし 春雄
化粧して待つ身をじろす時計の音 まさる
化粧した顔でチップの額を読み 竹莊
主婦としてタイストスカート隙がなし 愛論
赤いスカートこはむすの部屋の窓 風仙洞
大胆なモードのスカート短かき 凡平
いたずらの膝にスカート短かき 草右
売薬で充分ですと博士云い 落見
通天閣街も春の化粧して 史葉

南海電鉄川柳会

(大阪市)

辻圭水報

そんな規則おもしろい頭かき 尚史
規則違反女であつたおこりよう 宏子
金銭の要る規則書薄い紙で来る 貴山
労組は規則上手にストをする 泰泉

さみだれの貯金攻勢断れず 句念坊
規則での二階級昇進悲しゅうて 八郎
末端の規則ばかりが敵守され みなづき
徹夜して憶えた規則もう変り 和郎
顔もあげずに規則です規則です 路郎

明和川柳研究会

(西宮市)

樋口舟遊報

わが恋を狂わす恋に毎の無し すむ
恋をして父を眩しいものに見る 新子
真実のみじかい恋をくりかえし 舟遊
恋の空間五位驚の 声となり 悠風
まぼろしが凍りついてる冬の月 悠紀
リバイバルゲームに三味の手入れも 弦月
酔えば唱う課長の唄がはやり出し 正司
かるた会順に並べぬ手の捌き 三舟
割り込ませまいと願番脇をはり 梅志
みぞれだけにしましよと式近し 照見
風が出てキヤンブ不気味にビブラト 生薑
腕によりかけてキヤンブのめが焦げ 六童子
かくさねぬ焦りへ割れたベンの先 折馬
親も子も裸でつづく冷や奴 静馬
妻子まで裸にしたらつて来ず 亜鈍
大自然ブルトザが撫でてゆき 敬太
ヒューマニズムどこまでもおし通す 草人
金魚の死雨は朝から降り止まず 牧人

富柳会句会

(富田林市)

阿部柳太報

情夫待つ女月光ひととふみ 紅月
待つこになれて惚れたという弱味 呂人
待つ程に手酌のデンボ早くなり 八郎
盗人は待てと云われて走り出し 勇三
法善寺の煙にまかれて待ち呆け 美代
五分だけ待てとあると目でニラミ 尚史
待つだけは待ったと暮のいささく 周一
待ち呆け紅茶冷たくなったまま とも子
水ッ鼻の腫にちの灯がゆらく 六童子

おかしくはせずに知らせとふく仲間 幸吾
倦怠期ふくれた妻がふぐに似る 川柳堂
ふぐ料理ふぐは知らない味の味 静林庵
自家用車朝寝の社長先に着き 吉太郎
一朝の朝寝もならず女の座 東雲樓
朝寝した時に限って姑がくる とき多
寝坊して下宿の飯を喰いはぐれ 摩天郎

羽曳野どんぐり川柳会

松川美郎報

はずむ息勝ち名のり受けるみだれ髪 迷句
手まりつく何の苦も無いおき髪 花風
スタンドを消せば闇夜に匂う髪 三角坊
福白髪ですと課長おだてられ 惠太
倦怠期妻のセットが目につかず 春生
はつれ髪をなおして迎える妻の微笑 忠雄
子の髪を刈る緑側の母床屋 茂雄
母の髪つかんだままに子はぬる 計導
面会之母の白髪にくいており 計導
断髪式士儀に賭けた二十年 雄峰
胸毛とは別に頭は薄うなり 雄峰
金髪に柔道苦もなく持つてかれ 痴亭
髪洗う顔逆しまに子を叱り 晴嵐
療養の髪白きにふと淋し 達太
愛されて匂う今宵の洗い髪 白墨
ミイ、ハ族国籍不明の髪で行き 美郎
言葉までともに変えたる髪かち みちを
母の髪明治のままで終りそう 吾丁楽
髪毛の少くなつて金が出来 与太郎
髪をとく病める窓にも春まじか みどり
病人と思えぬ髪型面会日 加茂女
桃割れが彼氏と腕を組んで行き 川笑
髪を茶に染めても顔ははるくせず 子笑
月給日亭主女房の民に落ち 昌子
苦勞性髪は毛ばかりうすくなり 紅子
ジャジャ馬も何やら床し日本髪 夏雄
髪型を変えたとなんにひやかされ 惠生
春の日の緑側母の白髪抜く 千草
女湯だけにある洗髪料 くらら

諫早句会

(諫早市)

川岡雲眼子報

来る筈の為替を待つて髪をそり 竜泉
東風吹けば柳の糸が顔をなで 随心
努力また成らず浪人二年生 一呆
ぐるりつと廻つて花のまつさかり 綱洋
些かの疲れをみせて花に寝る 緑洋
武士道もなくて桜を淋しがり 美寿栄
たおられた花瓶の花に一升瓶 螢子
一枝も折るな折るなを騒ぎよう 多加子
たおられた花がバス中狭うする 能理子
出不良に酔うて一枝届けられ 雲眼子

丸紅飯田川柳部

川村好郎選

せつかちのくせにいつも遅刻する 一世
せつかちが又しくじりの受話器おき 福寿
せつかちなくせに魚釣たけは好き 良樹
末席のころからビールのセンを抜き 幸樹
集金の方はせつかちな妻をやり 好郎
宿坊にお色気のある女中も居 大樹
コケ生えた古木も春を知つて待ち 星斗
妹背山中を不粋な吉野川 立郎
千本の桜も「静」へ冷めたすぎ 泉陸
国宝とわたり御堂を又見上げ 好郎

酌よし
味よし

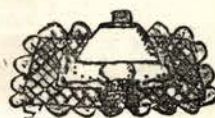
千日前大劇裏
TEL 〇二七二〇
アベノ橋近映地下
TEL 〇一四七

梅里の店

大萬

★大万川柳(第百三十五回)を募る
兼題「頼杖」 路郎先生選
締切・五月十五日 五句以内
発表・五月廿日 (店内掲示)
投稿先 阿倍野区松崎町三ノ〇
大万川柳会宛

柳 樽 室



路郎生

★雑誌に携っている、一ト月が実に早い。少しでもいい雑誌を眼にかけたいと編集局は張り切っている

★近ごろ各地から続々と句集が出る。よい傾向だと思う。新聞や雑誌に発表したものを更に句集にまとめると、又違った味で読めるものだ。それはその人の個性や句品がハッキリして、その人に親しめるからだ。★句集は個人で出すに越したことはないが、最近のように物価高ではよほど経済的に恵まれないでは出せない。その点、最近に出た、きやりの七人句集や平安の五人句集のように、親しい柳友で共著にするのも一つの方法に違いない。我が社でも数年前に、三人句集を出したが、すぐに売り切れた経験をもっている。この方法だと、少し余計に刷っても、その人その人の知人やファンに願わば、売れ残る心配がない。兄弟集や夫妻集を出すのもいいだろう。せいぜい、出せる時に出すに限る。

★大阪市に初の名誉市民が生まれた。不朽洞会の賛助、白川朋吉翁(元市会議長) 厚知菅橋彦翁(日本画家) がその光栄に浴された。不朽洞会洞友の岩崎愛二氏は藍綬章を受賞された。お欣び申上げる

★ボツボツ旅心が動くが、多忙に次ぐに多忙で容易に腰があがらぬ。七月の川柳川柳まつりが眼の前に来た。各地からのご出席が待たれる。

▼ペンの散歩▲

▼風薫る五月——あの緑のなかへとけこんで、いで湯とやらの情緒を味わってみたい。

▼久しぶりに座談会をした。「易談縦横」はほめていただけたとおもう。生々庵副主幹がたくさん資料を提供してくださったので原稿にするのが楽だった。

▼特集「男の句」は五月にちなんだものだが、次号は川柳と真向から取組んだものをお届けする。

▼大万川柳は今月から本誌で発表することになった。また人気ペーシが一つふえたことになる。

▼豆秋さんがなくなられて早や一周忌になる。豆秋川柳はわが川柳雑誌社の財産だとおもっているが、路郎主幹もときどき「豆秋がいたらな」とおさびしそうである

▼こうして豆秋さんをしのんでいるとき、ある文芸誌から原稿依頼があったので、川柳原稿の書けるガラではないが、豆秋さんの名句

を拝借して六枚ほど書いた。かつて川柳人が執筆していないとこだけに、ボクなりに氏の霊前にささげるつもりで力をいれた。

▼アメリカでまた死の灰をまきだした。ソ連と米國からの灰の谷間にあるわれわれは空気もウカウカ吸えないことになる。

▼米ソが一発ずつブチこみ合いをして、あとサッパリ手をひけ(読売) というようなことを云う人もある。どうだろうか、米ソのおエラ方、ひとつやってみたらどうか。

▼プロレスを見ながら、その凄絶さにショック死した人があった。こわいもの見たさだろうが、こんな人は日本舞踊でも見ていたらよさそうなのなのに。

▼ブラッシーという米人レスラーが、ガブツと頭に噛みつくのも、死の灰からみればチャチなものだとおもう。

▼若乃花が引退した。土俵の鬼といわれた名力士だった。勝つことだけなら名力士とは云われないが、米ソの主腦者たちより人間的であつたことだけはまちがいないさそうである。

▼ロッキングモーションをトヤカク言うのは打てないからで、けっきよは少年尾崎に、日本のプロ野球が手も足も出なかったことである。新人出でよは、川柳界にもつながる合言葉であろう。

▼印刷所の机を借りて後記を書いているのだが、ツツジの花がきれいだ。しかし今月もアタマが痛い。また雑誌がおくれるからだ。飛び休や連休は年中無休のボクには死の灰のようにコワイ。

(一三六)

★五月句会——川柳支部

★淀川句会・4日(金) 六時、題夜行・小食・苦心・所、十三西之町五丁目東淀川郵便局。★かがみ句会・2日(水) 夜、題、役場・交渉・挑む・人並み・寝不足、所池田古心居。★玉造句会10日(木) 七時、題、空・やけ・壁、所、市電玉造南百米大阪信用金庫。★明和句会・13日(日) 一時、題、人・情緒・桐、所、阪神電車鳴尾公民館。★京都句会・16日(水) 夕、題、未完成・吃る・だるま・選ぶ、所、四条繩手仲源寺。★南海電鉄句会・17日(木) 六時半、題、徐行・合言葉・思いつき所、難波高架下親和クラブ。★阿倍野句会・豆秋忌句会・20日(日) 一時、題、形見・はたる・コップ酒・豆・ふるさと、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。★333句会・26日(土) 六時、題、じくさく・ごつちゃ・がらくた、所堺市老松町三丁島野工業内会議室

★六月句会——川柳支部

★川柳奈良支部創立一周年記念句会★六月九日(土) 一時すぎ、兼題「奈良」「雨」「一年」、会場奈良高校書道教室、連絡・奈良法蓮町奈良高校川柳研究会。

お父さんの牛乳

銘酒

白牡丹
の銚子瓶

攝津酒造株式会社

うまい
安い
便利



副腎・肝臓強化

精がつく薬

パント錠

第二
第一製薬
東京・日本橋

副腎に効くパント錠は
精がつきます。疲れがとれます。

疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー性疾患

2錠・3錠・10錠

川柳

親でころ子心

価 150円
送料50円

『川柳雑誌』の川柳増及び近作柳傳の中から親でころ子心を
選んだものを多年に亘って根気よく拾い集めたのが本書である
載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に
深いものであるかを知ることの出来る共に有意義な書である。

東野大八著

風流

人間横丁

B 6型 二五八頁
価 250円
送料70円

★異常な戦争にまきこまれ、手となって帰還した著者
のサツクパツクな人生批判が、その雄筆からはとほし
るさまは凄い。まるで腕の哥えた板場の切れ味にも似
ている。★本稿は戦後十三年間、『川柳雑誌』に掲載
され、好評、サツクたりしものに補筆した雄編であ
る。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の緩らぬ読物
としてお薦めしたい。

高鷲亜純著

詩川柳考

B 6型 函入 定価三百八十円 送料九〇円

★著者は嘗て創生期ころの超現実主義者であったがそ
の詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今も柳界にあ
って庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇
る現代川柳批評家として世に語る。凡そ前向作家を自
負する柳俳人心証の書。

★送料金は振替口座をご利用が便利で安全です。切手代用可。

発行所 大阪市住吉区大内
万代西5丁目25

川柳雑誌社

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 (671) 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

あくび (十句以内) 黒川紫香選

植木鉢 (十句以内) 早川清生選

抜け道 (十句以内) 土井文輝選

影法師 (十句以内) 後藤梅志選

近作柳傳 (十句以内) 国弘半休選

文川柳塔 (十句以内) 北川春葉選

章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏
名雅字を明記する事。
▼ 「近作柳傳」は一般作家の雑吟を募
る。「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限
る。

B 列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十七号

定価 九〇円

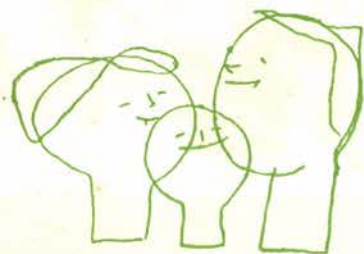
(禁転載)
半力年 五七六円
昭和三十七年四月廿五日印刷
昭和三十三年五月一日発行

大阪市住吉区大内万代西5丁目25番地
行印刷所 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 (671) 6081
振替口座 大阪 75050

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

オリンピック博



オリンピック東京大会組織委員会
主催 朝日新聞社 国立競技場 日本体育協会
大オープンセット…聖火台 ロンドン塔橋 凱旋門 マルクスブルグの古城 自転車とチューリップ畑 自由の女神 サンモリッツ風景など世界の有名な観光地を再現し過去に大会がひらかれた都市を紹介
オリンピック記念館… 旗火リレー予定コースと踏食隊のジープ車
東京大会会場及び競技場模型 世界の地図 日本のホープそして日本選手の手記
金 銀 銅メダルや参加旗 ユニホームなどの解説
自然動物園 自然水族館 観光灯台 標本展示館 スポーツランド 自然博物館 野外劇場など楽しみいっぱい
(日)(祝) 野外劇場で 午後1時から アトラクション 無料公開
・みさき公園 駐車場下車すぐ 期間中 特急も停車します

5月31日まで みさき公園

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手にかけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳話や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

川柳雑誌社

元日所 電話大阪6717(六)八二
定価 九十九円(送料六円)

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味わい方

価 二五〇円
送 七〇円
費

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたのもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、所界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

価 二五〇円
送 八〇円
費 八〇円
B 6 版
二五〇余頁